

太 玄

会報 第78号

令和5年9月

太 玄 会

太 玄（会報78号） 目 次

一、あいさつ

西村 東 軒 会 長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

伊 場 英 白 理 事 長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

下 谷 蕪 雪 事 務 局 長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

二、第64回太玄会書展

日 程 表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

役員及び各部部长・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

入 賞 ・ 入 選 者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

会 場 ・ 審 査 風 景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

授 賞 式 ・ 祝 賀 会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

謝 辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

特別講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

三、令和5年度総会

資料掲載・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

総会風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

四、太玄会所属団体のこの1年の活動・・・・・・・・・・・・ 36

（令和4年5月～令和5年4月）

五、太玄会所属団体の活動予定・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

六、受賞の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

七、特 集

伊 藤 桐 花・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

大 竹 伯 燿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

鈴 木 竹 園・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

備 前 徹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

松 橋 多 恵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

八、梅原清山先生追悼特集

追悼文

西 村 東 軒・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

江 原 見 山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59

石 井 蕙 園・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

荒 井 湧 山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

編集後記 広報部



第六十五回記念太玄会書展に向けて

会 長 西村 東 軒

六十四回展は大過なく終えることができました。これは、理事長と事務局長を中心にそれぞれの持ち場で協力と努力をして頂いた事務局の方々によるところが大きく、先ずは心から御礼申し上げます。

展覧会は運営方針を示してくださる幹部役員の先生方、そして事務局による実務運営に支えられ、また展覧会に玉作を制作参加してくださる出品者の皆様、係わり合いを持つ業者の皆様など大勢の方々を支えられて立派に開催することができるとです。本会のために一致団結し、皆で頑張るというよい形ができていると思います。

現在の本会は十五団体が集合し運営を行っています。従ってそれぞれの会派の立ち位置も様々であるのですが、そこは話し合いと知恵を出し合い前向きな調整で乗り越えてきました。諸先輩方の残してくれた歴史でもある民主的な運営方針を基に『今の時代の工夫』を盛り込みながらよりよい太玄会を目指して参りましょう。

四月の社員総会では将来に向けた多岐にわたる議題のご承認を頂き無事終了いたしました。

来年は六十五回記念展となり、先人の書の展示、記念講演会などを企画しています。また更に五年後には七十回記念という大きな節目を迎えます。会員の皆様からの積極的なご意見や提案がお寄せいただければと期待する次第です。



第六十四回太玄会書展を終えて

理事長 伊場 英白

第64回太玄会書展は、昨年に引き続き新型コロナウイルスの影響をうけて、事業の縮小を余儀なくされながらも開催することができました。前回展より規制がやや弱まったとはいえ、コロナ前のようなごく普通の展覧会開催とはいかず、変則的な開催にもかかわらずご理解とご協力をいただきました会員の皆様には感謝申し上げます。

今年度は、展覧会の会期中に美術館講堂において、日展理事・土橋靖子先生をお招きし『日本の心 和の心』と題した講演会を実施いたしました。現況を鑑み、講演会は密にならぬよう人員の確保に留意しながらの開催でしたが、無事盛況裡に終えることができました。

さて、太玄会は一般社団法人としての歩みをスタートさせたばかりですが、歴史ある太玄会の歩みを更なる強靱なものへと着実に進めていくためには、会員ひとりひとりの力の結束が重要です。個の力が、ひとつの会の基礎力となり、太玄会は書道

界としてはめずらしい15団体による集合体ですから、その組織力を活かし更に発展させていきたいものがあります。

そして、書の分野に限らず、少子高齢化の波が押し寄せている中で、若年層への地道な働きかけをすることは大変重要なことであり、数年前から学生部として小中高生の応募を受け、約470点の出品があります。これは非常に喜ばしいことで、学生部の更なる充実発展と、若手の育成は太玄会発展の礎となることでしょう。

次回展は、65回の節目としての記念展になり、その詳細については、現在、理事会で鋭意検討中です。公募作品の確保など課題はありますが、より良い記念展にするために、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。



第六十四回太玄会書展を終えて

事務局長 下谷 蘊雪

令和四年度の総会後は多くの方々のご協力で事務局長を務めさせていただき、第64回太玄会書展を無事終了する事が出来ました。開催直前までコロナウィルスの状況がはつきりせず、入場者の対応・授賞式・懇親会等事務局全体で検討し進めました。また今展では日展理事の土橋靖子先生に『日本の心 和の心』と題してご講演をいただきました。

多数の方々に聴講いただきたいとの思いとコロナによる人数制限との間で準備は大変でしたが結果的には聴講希望者が多く来場し、当初の予定以上の入場者となりました。

講演は土橋先生のお人柄と、耳を傾けたくなるお話しぶりで、アツという間に予定時間がオーバーとなりました。

後半は揮毫もあり漢字系の多い太玄会としては繊細な小筆の動きと大胆に動く大字の筆使いに目が釘付けでした。又抽選会では土橋先生の作品集を戴きました。最後は司会のミスで当選者が増えてしまいましたが土橋先生のご厚意で揮毫作品をいた

だけの事になり、嬉しさ倍増の大盛況で閉会となりました。

次年は第65回記念展です。新しい企画に向けてスタートしました。

更に近年の出品者数減少傾向に危機感を感じ何らかの対策・検討が必要と臨時理事会を行い検討に入りました。

会員の皆さんもこの事は感じられていると思います。書道界全体に言える事でもありますが良策は出ないかと思いますが対策・検討は継続してまいります。

令和五年度の総会も皆様方のご協力で無事終了し新年度のスタートとなりました。懇親会形式も変わり、少しは楽しめるものとなり、少しずつではありますがコロナから解放され通常の活動を取り戻せるかと思っております。

第64回 太玄会書展〔併催 第7回学生選拔展〕

日程表

										5 1	年月
26	25	24	23	22	21	20	19	9	8	7	日
木	水	火	月	日	土	金	木	月	日	土	曜
作品最終撤去日	開 会	開 会	開 会	祝賀慰親会 授賞式 開会	昼授食 授賞式 開会	特別講演会 開会	陳 列	鑑別・審査	会員賞選考	搬 入	作業内容
9 :30 ～ 15 :00	9 :30 ～ 17 :30	9 :30 ～ 17 :30	9 :30 ～ 17 :30	15 :30 ～ 9 :30 ～ 17 :30	9 :30 ～ 17 :30	14 :00 ～ 9 :30 ～ 17 :30	10 :00 ～	11 :00 ～	11 :00 ～	10 :00 ～ 12 :30	時 間
都美展示室	都美展示室	都美展示室	都美展示室	上野精養軒 ゝ	上野精養軒 (中止) ゝ	都美展示室 都美講堂	都美展示室	ゝ	都美審査室	都美搬入出室	会 場
搬入出部	ゝ	ゝ	会場当番	祝賀会部 褒賞部 渉外接待部 会場当番	褒賞部 渉外接待部 会場当番	ゝ 会場当番	陳列部	ゝ	審査事務部	搬入出部	担 当 部

役員及び各部部長

理事	理事	副事務局長	副事務局長	副事務局長	事務局長	副理事長	副理事長	理事	董事	董事	董事	董事	副会長	副会長	副会長	会長	常任顧問	常任顧問	常任顧問	常任顧問	常任顧問
垣内蘭畦	海野十方	伊藤慈恩	大場大幹	江原見山	下谷蕪雪	飛田冲曠	小出聖州	伊場英白	高橋心行	伊東玲翠	小原天簫	瀧沢曲峰	鈴木映華	金丸鬼山	宮負丁香	路野雅宣	西村東軒	石川流芳	垣内楊石	笠原聖雲	福田丞洲
		電算部長	学生部長	祝賀会部長	褒賞部長	陳列部長	審査事務部長	搬入出部長	図録部長	渉外接待部長	広報部長	事業部長	会計部長			監事	監事	総務	総務	総務	総務
		望月擁山	鳥越新芽	菴澤幸楓	小泉興起	長谷川香濤	伊藤慈恩	江原見山	小林碧桃	石井蕙園	荒井湧山	落野祐涯	山口香葉			小林紫雲	志村恵風	堀越壽崑	中田珪川	中尾勝子	植木蒼穹
																					石島廻山

第64回 太玄会書展入賞・入選者（五十音順）

理事会員の部

太玄大賞

伊藤桐花 大竹伯燿 鈴木竹園 備前 徹
松橋多恵

審査会員の部

太玄賞

金子慈祥 鈴木翠汪 真溪玲泉 山崎のり子

全日本書道連盟賞

太田翠華 釜田 響 中川蘭葉 米山玄穹

正会員の部

特別賞

小暮兆琳 下間佳璋 高崎梅仙 中澤澄心
茂木朱櫻

奨励賞

飯田歌林 牛澤智水 高野秀影 富本琇瑩

会員新人賞

石井白玲 小川爽歩 鎌形美容 鈴木智子

高橋紅葩 竹内翠紗 増渕香泉 町野薜萌
山岸信彦 油井謙輝

準会員の部

推選

井堀咲麗子 小野翠香 窪田静花 毛塚佳泉
小出厚隆 古谷野星麗 児山九聲 坂智大
鈴木光濟 田中萩華 玉村華堂 寺崎醉炎
中村丹裳 夏目紅恵 福岡華泉 福島征英
藤平玉峰 藤原光水 森 千花

準推選

荒井蓬月 石川芳泉 井出隆鳳 稻生妙子
上野桂尚 植松走風 瓜田余響 大熊 勇
岡島寿石 勝畑喜市郎 川島遙青 川端紫雲
川畑美風 後藤詩織 後藤爽紀 小林恍香
桜井佳簫 塩澤智加 杉山雅子 仙石良子
高橋希兆 只野藻景 田中春敬 寺澤陽子
西方勇玳 西原彩華 根本恵和 長谷川照葉
日野 緑 日野出夏穂 平田光空 福塚光徳
古川紫虹 松沢上清 山田光艶 山田緑水
吉田 愛

公募の部

特選

新川 亜弓	井内 淑恵	池田 華遙	稲葉 夕映
岩崎 悦子	上野 裕子	上村 霽麗	大井 綾華
大川 華風	岡本 美佳	甲斐谷 朋隣	数本 好慧
片岡 久美子	金丸 肇山	佐藤 英	佐藤 清泉
鈴木 光	高木 睦子	高柳 浩美	竹治 青麗
竹村 恵鳳	谷 丹霞	野澤 和翠	原田 勝枝
松浦 直子	三浦 明燭	御田村 翠玉	横島 輝枝
横瀬 晃子	綿内 良子	渡邊 青羅	渡辺 抱琴

準特選

相澤 順子	阿部 雅	荒井 青蝶	新井 青稜
石井 琇水	石島 秀山	磯谷 ひなた	一乗 敬子
伊藤 貴子	伊藤 兆菜	大木 起代子	小澤 桐洋
小田 順子	金子 絢香	金子 きみ代	狩生 久美子
草間 秀幸	國島 住子	国吉 和子	小池 礼凌
小島 文明	小山 美紀	斉藤 明穂	櫻井 翠嶺
佐藤 榮壽	佐鳥 光浩	島本 和樹	杉山 香雨
鈴木 凡燕	須藤 隆史	染谷 君恵	高橋 幸江
武田 久代	田中 恵美	田中 春曄	田中 嶺華
田邊 明子	千野 霜月	角田 恵美子	内藤 豊珠
内藤 芳則	中島 菜乃加	中村 春彩	中村 緑簾
中山 さおり	西岡 美知江	長谷川 真子	藤沢 貞行
藤本 真理	古屋 佳朋	舛田 昌玄	松本 寛恵

森 敬子	森山 泰子	山浦 柚美	山上 尚子
山中 明聡	横瀬 克江	吉田 壮秀	吉田 富子
米澤 志織	渡邊 恵壽	渡辺 真司	

入選

相澤 未来	赤塚 智子	飯田 小夜子	飯田 そら
池田 奈々恵	石川 清香	板倉 絢音	市川 麗
伊藤 幹夫	岩間 鶴巢	榎本 輝映	大河 原佳子
大嶋 得枝	岡田 恵華	小野 田子雪	金子 夕奈
亀田 英舟	川原 江以子	神田 真美	城所 そら
草薙 美恵	串橋 緑波	倉持 昌世	劔持 優奈
小岩 瑞季	小林 康堂	小林 ひな子	小森 カズエ
坂本 壽蓉	佐藤 恵子	重田 江彩	志村 琴恵
鈴木 明子	高内 芝蘭	寺島 陽子	東瀬 青綬
友成 恵	中島 みつ子	中村 結希乃	中谷 胡翠
永山 由佳	成田 晴哉	庭山 笑子	濱上 裕子
濱野 育子	林 葵丘	福士 浩美	福田 佳子
藤崎 澄瑩	藤田 靄香	藤巻 菊江	牧島 江健
松浦 空吾	松村 知勝	丸山 兆基	宮下 美和子
村田 定暁	八木 智美	山田 静光	山田 緑亭
横田 亜矢子	吉野 清美	若麻 績弘道	

高校生の部

準特選

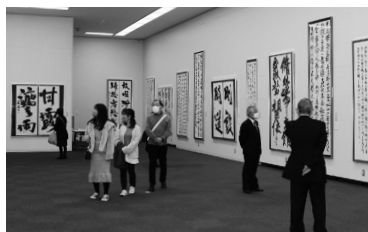
青沼理梨	網谷真介	石原姫星	大川葵
大澤珠璃	小原双葉	桑原歩実	辰巳杏里
田中百花	中村優衣菜	増田佳歩	皆川理名
宮本絵梨	吉田桃音	渡邊海帆	

入選

青木奈央	青木悠里花	麻生みらい	五十嵐康太
井口愛萌	石橋琉翔	伊藤和瑚	今津滉
上手美月	太田葉七乃	岡本頼樹	鬼形紗央
川島ちほ	木下奈映	木本実佑	栗原彩寧
小島直紘	後藤優月	小西怜	佐々木香鈴
庄司一駿	秦野玲夢	杉本恵美	鈴木まこ
瀬川実佑	高野麻美	高橋愛実	高橋未羽
宝田和	竹鼻美羽	玉置芽依	富田佳文
鳥居大暉	内藤唯月	中島真子	中村京香
行川宏	成田有那	西哲	野田浩生
林美那	福井順美	藤井あおば	降旗羽菜
本多彩乃	松本優	真鍋優妃乃	宮川結有
村松美美	茂木倅輝	矢田貝有香	薮原美來
山上彩葉	山田希	山端花歩	吉田和真
渡辺啓太	和田柊		

第64回 太玄会書展 会場風景

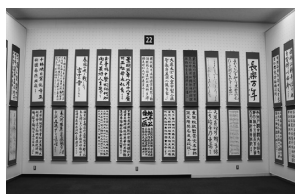
令和5年1月20日(金)～26日(木) 会場:東京都美術館



会場風景



受付



学生選抜展



会場風景

作品解説



伊場英白 理事長



金丸鬼山 副会長



蒔野雅宣 副会長



宮負丁香 副会長

第64回 太玄会書展 審査風景

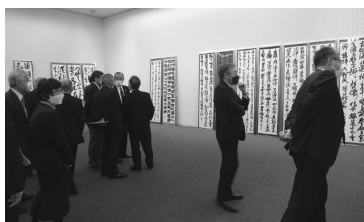
令和5年1月8日(日)～9日(月) 会場:東京都美術館



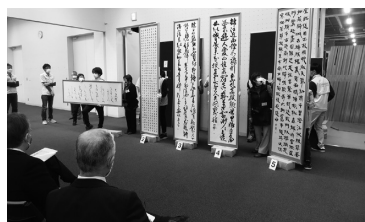
審査風景



学生展審査風景



会員賞選考風景



審査風景

第64回 太玄会書展 授賞式・祝賀会

令和5年1月22日(日)15時30分開始 会場:上野精養軒

授賞式



運営委員



審査事務報告
伊藤慈恩 副事務局長



挨拶
西村東軒 会長



授賞式風景



今年度当番審査員



全日本書道連盟賞受賞者



太玄賞受賞者



太玄大賞受賞者

祝賀会



乾杯発声
落野雅宣 副会長



祝賀会風景



開会の辞
宮賀丁香 副会長



閉会の辞
金丸鬼山 副会長



祝賀会風景



第64回太玄会書展

謝 辞

この度は、伝統ある第六十四回太玄会書展において、入賞の栄に浴することが出来たこと、身に余る光栄と心より御礼申し上げます。これも偏に審査に当たられました諸先生方のおかげと深く感謝申し上げます。

また、今回の受賞を自分のことのように喜んでくださいました先生・先輩・書友の皆様、そして家族の温かい見守りの中で学んで来られましたことに、改めて御礼と感謝の言葉を申し上げます。本当に有難うございました。

私は、後漢末から三国史の魏にかけての隸書の形に心惹かれて、作品の制作に取り組んで参りました。しかし、終息の見えないコロナ禍の中にあつて書が続けることに迷いが生じることも正直ありましたが、この度の受賞により、進み行く先に明かりをともし頂けたことに、新たな勇氣と学び続ける意欲を与えられたように思います。

本日、かように厳かで心温まる授賞式を挙げて頂きました。私たちは、宋代・明代また平安の世と、学びの土俵はそれぞれに違つてはいたとしても、それぞれの時代の中で懸命に生きて書を紡いで来た過程の中には、私たちの想像を超えた困難が有ったのだらうと、コロナを言い訳にして書の歩みを止めることは出来ないものと実感しております。

今回の受賞を契機に一層の精進に励む覚悟で御座いますので、変わらぬご指導とご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

最後に、一般社団法人太玄会の益々のご発展をご繁栄ご祈念申し上げて受賞者代表の謝辞といたします。

令和五年一月二十二日

受賞者代表 真仙会 松橋多恵



授賞式風景



謝辞 松橋多恵氏

【第六十四回太玄会書展 特別講演】

演 題…「日本の心と筆文字の世界を通して」

講 師…土橋靖子先生（日展理事・日本書芸院理事長・蛙園会代表・現代書道二十人展メンバー）

◎講師紹介【西村東軒会長】

こんにちは。コロナということで、この二年間は講演をすることが出来ず残念だなという思いでいましたけれど、今年は多少状況も変わり講演会を実施しようということになりました。今回は、本当にお忙しい中、土橋靖子先生をお迎えすることができました。土橋先生は、書道界女流作家として大活躍されている先生で、私どもも、本当に来てくださるだろうかと思っていましたが、今回実現できましたことを大変うれしく思っております。

土橋先生のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。女子名門の桜陰学園から学芸大に進まれたという経歴をお持ちになり、現在は日展の理事を始め大きな役職をたくさん担われています。これらについてはお配りしたプロフィールの中に書いてありますのでご覧になっていたただければと存じます。

それと今回は、特別に土橋先生に席上揮毫をして頂けること



になりました。本日は機材の調子が叶わず映像で映すことが出来なため、少しずつ順番に舞台に上がっていただいて、皆さんに見て頂ければと思っております。それでは、土橋先生、よろしく願います。

【土橋靖子先生】

皆さん、こんにちは。只今、ご紹介に預かりました、土橋靖子でございます。今日は、コロナ禍の中、こんなに沢山の先生方にお越し頂き、まず太玄会の皆様に感謝申し上げます。一生懸命務めますので、どうぞお時間許す限りよろしくお付き合いください。

今、ご紹介にあずかりましたが、少しだけ、私自身について、お話を加えさせていただきます。私は千葉県の市川市で生まれ、東京都内の学校に通い、そして縁があつて神戸の方に居を移し、二十八年間住んでおりました。かたや書は、私の祖父にあたる京都の日比野五鳳先生の薫陶を受け、一昨年前まで五鳳先生が創設された水穂会員として活動しておりました。その流れから昨年、蛙園会を立ち上げ、また東京に居を移しました。そういった流れから書の故郷は京都、東京、千葉に生を受け、半分は神戸に住み、また東京に戻り、一体私のルーツは何だろうと思つた時、人生の歩みとともに土橋というのは、あえてしているわけではありませんが、括りにはまらないような生き

方を今のところをしているのかなと感じています。でもそれは、もしかしたら、今私が作品に対する考え方にも影響を及ぼしているかもしれません。やはり、仮名のルーツは漢字であるし、関西でも東京でも、この「書」という分野は、芸術、日本を越えて、大げさかもしれませんが、日本の書、日本の心、和の心につながっているかなと思っています。そして、私が出来る書を通して日本の美しさ、日本の良いところを、何か伝えられるような仕事をしたいなというようなことを思っている次第でございます。とにかく、今日は「日本の心、和の心」と、非常に大きな課題ですがお話をさせて頂きたいと思っています。

日本の美について

「和とは」

この「和」という言葉は非常によく聞きますが、あえてもう一度、辞書を紐解いてみますと、こういう意味合いがありました。典型的には、「やわらぐ」「おだやか」「のどか」、

柔和・和気
平和・和解
調和・和音
和文・和服
和州

1 日本の美について

①「和」とは

1. やわらぐ おだやか のどか
2. 仲良くする 争いをおさめる
3. 合わせる
4. 日本、日本語 = 倭
5. 「大和の国」の略

- 2 6. なぎ(風がおさまり波が穏やかな状態)

また「仲良くする」「争いをおさめる」「平和」あるいは「和解する」という意味もあるようです。また熟語には「柔和」「和気」なども見られ、「合わせる」という意味からは「和漢」「調和」「和音」などの言葉も見ることができます。その他にも「倭」「大和の国」の略など日本独特の意味合いで日本そのものを表しています。また「日本の心」「和の心」というように日本そのものを表す言葉として使われることがあ

ります。例としては、「和文」とか「和服」などいっぱいありますね。

また、奈良時代は大和の国の略ということで、「和州」とも歴史の中には書かれています。この他にも「風(なぎ)」と言って風がおさまり、波が穏やかな様子という意味もあります。皆様どうぞでしょう。これら全部を読んでみて、この「和」という言葉に対するイメージというのが、おそらく皆様の中にも広がってくると思いますし、非常に穏やかで平和、とても良い言葉ですね。この「和」と言う言葉、私もとても好きで、前回の個展は「和を紡ぐ」という副題にいたしました。今年、実はまた個展を開くのですが、作品も大体出来ましたが、「和漢の調べ」という副題に東京でもやらせて頂く予定です。この「和」というのは、私にとって特別にこだわりのありまして、これを掘り下げていくということをおのの一つのテーマにしているわけでございます。いずれにしても、今、ウクライナの問題とかちょっときな臭い、中国本土と台湾問題等々ありますが、もともと私たちの祖先は、とても平和を望んでいたのではないかと、この「和」という言葉を紐解いてみるとつくづく思います。当然、歴史の中にはいろいろな静いや争いがあったと思いますが、民族としてのアイデンティティというのは、やはり非常に穏やかで、できるだけ争いを起こしたくないという、そういった先祖の血が私たちの中には流れているのではないかと、思う次第でございます。

日本人の美意識

この「和」について、もう少し調べてみますと、ドナルド・キーンの「日本人の美意識」に良い文章が見つかりました。

「暗示、または余情」「いびつさ、ないし不規則性」「簡潔」「ほろび

易さ」である。こうした互いに関係する美的概念は、日本人の美的表現の、最も代表的なものを指し示している。とはいえ、これらの反対概念、すなわち「誇張」「規則性」「農饒」、そして「持続性」なども、決してなくはないこと、これは繰り返すまでもない」ということで、この言葉を少し頭の中に入れておいてください。

日中美意識の違いの傾向

次は、ものすごい私の独断と偏見かもしれませんが、日本の文化のおおもととはやはり中国ですね。このおおもとの中国と日本を比較すると一番簡単で間違いないのは国花です。中国の国花は「ばたん」ですが、日本の国花は「さくら」です。特にさくらの場合は、日本人の中には咲き始めが良いという人もいれば、満開のところが素晴らしいという人もあります。時には散り始めが何とも余情があつてよろしいという、色々な感覚をお持ちになる方が多いと思います。このさくら

というのは、日本ならではのものだと思います。私、ばたんもさくらも好きですが、やはり何となく、なるほどと思うようなところを感じなくもありません。

そして、この「美」という言葉、語義について調べてみましたら、「美」というのはもとと、「羊」という字から生まれているそうです。この「美」に関する言葉に「麗しい」というものもあります。この「麗」という字は、実は「鹿」という字からきています。どちらも立派な

角があるということで、中国の方々というのは強大なものに美は宿るというふうに考えられているようであります。例として、万里の長城であるとか、それから世界一広いという天安門広場など、とにかく大きいことは良いことだ！ということなのかもしれません、大きな世界、強いもの、そういったものに憧れるというか、そこに美を見出すというのが、中国らしさなのかもしれません。

それに対して日本の「美」といえば「ああ、きれい」「美しい」という単純な「きれい」なんです。そこに強さとか大きさとか、そんなものは含まれてない。また「きれい」というのは、濁ってないということ、清潔さということにもつながると思います。もしかしたらもつと奥底には清潔感、精神性の高さなども含まれるのではないかと思います。そういった価値観や考え方の違い、この「美」という一言に對しても、やはり中国と日本では大分違うのかもしれませんが、美意識の例ですと、先ほどの دونالد・キーンの話にもありましたが、面白い話がございます。最初の美意識の違いに関する資料で中国は偶数、日本は奇数を好むと書きました。以前、私が神戸に住んでおりました時、中国人の方が多いんですけども、家の玄関によくライオンなのか獅子なのか二つ並んでいるんです。この二つというのが何となく私は新鮮というか、馴染まないというか。日本ですと一個にしときたい気がしません？漢字の先生方は、よく作品の表現として対聯というのを作られますけども、例えば床の間に對聯というのは、仮名の世界ではまずないですね。二曲屏風で、二枚つなげるというのはありますが、いわゆる軸を對にして床の間に飾るといふのは見かけません。また、結婚式のお祝いでも中国人の方は四以外の偶数、二、六、八、十万円とか、偶数でお祝い事をする人が多いですね。日本の場合は、三、五万

1 日本の美について
④「和」とは

図 日中美意識の違いの傾向(見)

	「美」について	美意識の例	国花
中国	羊：(ひつじ) 麗：麗(しか) 強大なものに宿る	偶数 均り合い 対偶 重厚長大 反り(建築において)	ばたん
日本	清潔さ 精神性	奇数 不規則性 余情 はかなさ 直感	さくら

4

円とかどちらかというと奇数が好きみたいです。私も何故か奇数が好きです。偶数が嫌いなわけではないですが、何となく奇数というのは、変化から面白さが生まれると思います。つまり、きれいに割れないという不規則性ですね。

また、ある方のお話ですが、建築でも中国は割と屋根に反りを多く使うようです。でも、日本は割とフラットですね。美意識において「反り」と「直線」というもの、これも日本と中国で対比して考えることができるのではないかと思います。先ほどのドナルド・キーンの言葉にもあったような傾向というものがあるのではないのでしょうか。この建築につきましても、六〇七年前に宮中に参内する機会を頂いた際、その時に思ったことはものすごく簡素なんです。決してきらびやかでないのです。その代わり、身が清められるというか、本当に澄んだ空気で広々していて、そして華美でなく、格調の高い、そういった空間に参内させて頂き、今でも私の脳裏に浮かんできくるものがございます。

日常における和の世界

ここからは「日常における和の世界」について、「書」をいきなり持ってきては面白くないので、私たちの身近な中に「和」を感じるものについて考えてみたいと思います。お華もあれば、お茶、風景などいろいろあると思います。食事、和食、お祭り、いろいろ「和」を感じるものがあると思います。

私はやはり仮名の専門で散らし書きとかを特に学んで表現している手前、生け花に気になることがあります。皆様もお好きな方もいらっしゃるかと思いますが、私もご多分に漏れず、嫁入り修行ということ



図1

で二十歳から二〜三年間、草月流の先生の門を叩いて、生け花をかじったことがあるんです。その時もお花には主枝と副枝があつて必ず太さが違うんです。

(図1) この木が一番太いですね。これがたぶん主枝だと思います。この方向も絶対に平行ではなく、上手く枝が向かい合っています。曲線があり、直線があります。たとえ直線と直線でも途中で節がある。これ一つとっても、散らし書きに非常に参加になるものがあります。この根締めを左に片寄せ、左側に世界を広げて、右側は何もない。

杉岡華邨先生が命名されましたが、寸松庵色紙に「虚実式」と言つて右側に三行書いて、左側は何も書かない。そういう非常におしゃれな表現方法があります。この生け花もやはり「虚実式」です。

右側が「虚」で左側が「実」ですね。感覚的にとても和の世界が、散らし書きにもどこにでもつながるような気がします。難しく考えるというよりも、見ていて良いなあ、というふうに思うところがあります。

(図2) この写真もそうですね。一本として平行で同じ力の幹がありません。私、二日前に有山社書展に伺い、篆書の特別展覧会を拝見しました。会場を一巡しとてもいい勉強させていただきました。とても良い拓本、印刷もありましたが、一番驚きましたのは、入ってすぐに朱の拓本がありました。それを見たら、縦線が上から下まで真っ

すぐ同じところを通ってるんです。これにはびっくりしました。こんな二メートルもあるの从上から下までの文字の縦線が全部通っているんです。これにはびっくりしました。まさに謹厳であると思ったのと同時に、仮名とは究極の違いだと思いました。仮名はいかに一行を通さないかなんです。一行をいかに通さないでまとめるか。つまり、先ほど言った不規則性なんです。ただ、不規則のままですと作品にはなりません。不規則の中にもどうまとめていくかというのが実は、仮名の面白いところでもあり醍醐味ではないかなと思います。あの小篆を見た時、もう本当に「厳しい世界だな、この世界も」と思いました。もちろん篆書や篆刻もそうですが、究極揃えるというのは、かなと大きな大きな違いの一つだなと思いました。私は、お弟子さんに稽古で指導する時、「木を見て森を見ず」になってはいけない、と



図2

良く言うんです。私自身もそれに気を付けています。でも、篆書で真っ直ぐに書くことも木も森も見なければ達成できないわけです。ですから、目指すところは違うようでも、そこに書の道の厳しさといつか、その道の厳しさは同じだ



図3

なあと考えた次第でございます。

(図3) これも同じです。大好きなものですが、これも主枝といえ、この一本の線ですね。この線に力がなかったら、この作品はバランスが崩れますし、いかにも倒れそうで倒れないという、本当にバランスの究極のところなんです。先日、日展で彫刻にもそういう作品がありました。これを見てもやはり、彫刻の作品のバランスの取り方に通用するところがあるのではないかなと思います。

(図4) これは、私の素人写真ですが、でもちょっと良いでしょ。(笑) これは、たまたま工芸の先生から頂いた花器がありまして、「ああ、うれしい」と思ってベランダを見たらサザンカが咲いていたので切って生けました。後ろは五鳳先生の作品ですが、置いてみたら何かめっちゃうちゃ良いと思って自画自賛したものですから、一枚入れときました。(笑)

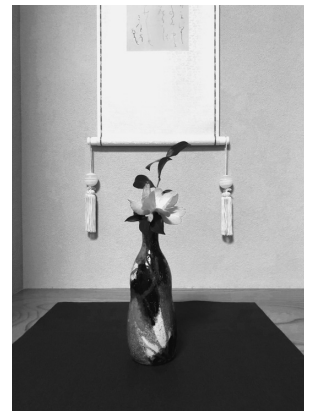


図4



図5

(図5) これもやはり日常における和の世界です。先ほど申し上げた不規則性ということ、私は常々憧れというか、この写真は、一間半ぐらの広い床の間、その隣に違い棚があります。これは絶対に日本ならではのものではないかと思うんです。何もない空間がたぶん一間ぐらいい



図6

と思います。これも不規則性ですね。本来、半分を床の間、もう半分を棚でもいいはずなのに、この絶妙なバランスというものが、日本のアイデンティティーに不規則性を好む感覚が宿っているのではないかと思ったりいたします。

(図6) これも日常と言っているのか分かりませんが、修学旅行で京都の龍安寺の石庭へ皆さんも行かれたかもしれませんが、まさにこれが不規則性ですね。全く規則がありません。けれどもこの場所であればいけないというところに、この石がたたずんでいます。これも日本人の持つ繊細な感覚からのもので

あり、こういうものがとても良いと思って、たくさんの方が訪れるところも、やはり日本の素晴らしさなのではないかと思います。読んだ本によると、たくさん中国人の方が日本に來られて、こういった石庭を見ても何にも見るところがなかったと帰ってしまう人もいるそうです。刺激が少なすぎるのかもしれない。こういった、日常における和の世界の不規則性であったり、はんなりであったり、そういうものが、こういうところにも感じられるのではないかと思いました。見ているだけでも良いですね。

(図7) これは継色紙というもので見開きに「や(夜)まさくら(良)か(閑)す(春)み(見)の(濃)まよりほ(本)のか(可)に(尔)もみ(三)てし人こそこ(故)ひ(悲)しか(家)りけ(介)れ」と左から書き始め、右に戻るという構成になっています。これだけの太

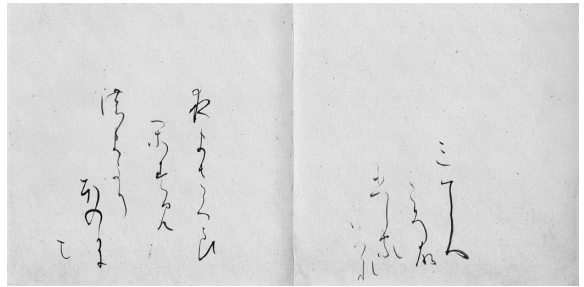


図7

きな余白を取って書かれた古筆は、今現存する中では継色紙以外にはありません。寸松庵色紙、升色紙はこの半分です。卷子本など仮名にも様々な古筆がありますが、この余白を一番取っているのはやはりこの継色紙ではないかと思います。この継色紙を見ていると、まさに不規則の中の規則です。師匠の日比野五鳳先生がよく言っていました。「アンバランスのバランスや。まず、その辺のところを考えたな」とよく言われていました。散らし書きの時は、まず主従を決めなさい。五分五分はいけない。六対四、七対三、八対二、九対一であったり、時には十対〇ということもあります。継色紙にはそういったアンバランス、不規則性の中の規則、アンバランスのバランスというものを古筆から読み取るんだということをよく言われました。

(図8) これは金閣寺ですね。「日本の美のみやびとわび、さび」ということで一つ考えてみたいと思いますが、こういった不規則性とか奇数を好むとか、いろいろな日本の美意識の中にね、もう一つ、別の分け方として、「みやび」というのと「わび、さび」というのがあると思います。

このみやびというのは、実は中国から來た言葉です。皇帝や貴族など権威のある人たちが、富を表現するところから始まった「みやびやか」というものがあると思います。日本にも、実は、平安貴族



図8

の中にこの「みやび」はありました。ところが、その後の武家社会以降、時代が少し下がるたびに「みやび」よりも「わび、さび」という感覚が日本人には先ほどお話ししたアイデンティティーを考えるとあったのではないかと思います。ですから今も「みやび」はないわけではありませんが、どちらかというと「わび、さび」に心惹かれるということが、私たちの中には多いのではないかと思います。この金閣寺は、金だからこれは「みやび」の象徴かなと実は思っていました。しかし、じっと見てみるとやはり「みやび」ではないですね。全部の風景からこれは金色なのに決してこれは「みやび」ではないです。やはりここには、きちんとした「わび、さび」の世界が入っているような気がします。

まあ、あまりに煩雑な毎日を送っていると、もう何にも考えないで、こういうところへ行行って時を楽しみたい。そして、自分の感覚、人間としての感覚、日本人としての感覚をもう一回磨きたいと思うことがあります。

(図9) さて、これは急に出てきましたが、日常の生活の中の「みやび」と「わび、さび」についてです。女性の方も多いと思うので、見るだけでも何となく気持ちがいいでしょ。着物の中でも琳派風のいわゆる「みやびやか」な着物もあるわけです。そういうものを好まれたり、あるいは着る機会というのがありますが、「みやび」と



図9

いうのは日本人の生活の中に底の方に脈々とはつながっていると思います。しかし、割と影を潜めているというのは確かかもしれません。

(図10) こちらは同じ着物ですが完全に「わび、さび」の世界ですよ。シックというやつです。このシックというのは地味でもない、派手でももちろんない、そこには「わび、さび」としかもう表現できない何か意味合いがあるのではないかと思います。これはお茶の世界にも通じることだと思えます。何か心が惹かれ「あら、いいわね、落ち着いていて」みたいな。そういう派手を好む人と地味を好む人があるように、好みもあると思いますけれども、やはり日本の文化の中で大きな部分を占めるのが、「わび、さび」ではないかなというふうに思っています。

ここから突然、筆文字の中の日本の美について入ります。今のところ、日本の美について、和とは、そして日常における和の世界、日本の中の「みやび」と「わび、さび」というものを取り上げて、少しお話をさせて頂きましたが、いよいよ筆文字の世界にスポットを当て、日本の書は一体どこから来ているのかということに移ります。日本は中国



図10

から漢字がもたらされて、それが、仮名になったわけです。平安時代、遣唐使が唐へ派遣されて、仏教や様々な紙や書物などいろいろな文化を日本にもたらしました。その後、遣唐使が廃止と同時に少しずつそれまでに輸入された文化を熟成させ国風文化としたわけです。つまり、仮名は王羲之のDNAを持っているということなんです。口で言うのは簡単ですが、不思議なことを折々に思うんです。後ほど、お話しする機会があるかもしれませんが、やはり私の目指すところは、日本人の「心の書」「日本の書」「和の書」なんです。そうなると日本語というのは当然、漢字と仮名でできているので漢字も書けないと本当の書が書けないと思ひまして、仮名に軸足を当然置きつつ、遅まきながら学生時代に学んだものを一人でコツコツ勉強してきました。もう思い余って漢字の先生にもう一回門を叩こうと思った時もありました。ただ、その時にもう一度考えたのが、五鳳先生から学ばせて頂いた漢字の勉強、漢字の用筆でした。幸いにもコピーではあります但五鳳先生の漢字の手本が手元にあって、それから二十八歳まで習った五鳳先生の指導方法を思い出しながら、五鳳先生の審美眼に合った、五鳳先生の用筆に基づいた、自分なりの漢字の勉強をしていくしかないと思ったのです。私が二十八歳の時に五鳳先生とお別れをしたのですけども、まあコツコツと、ポソポソと言うか、現在も少しずつ勉強をしているわけです。その一環として王羲之の澄清堂帖を買ひまして、字書作るのが好きなもので、いろいろな字書を作っているんです。王羲之であったり、良寛であったり、于右任であったり、いろんな字書を作っていると勉強になりますね。実際書くというよりも、疲れて何も出来ない時、だからといって遊んでいると何かすごく罪の意識があるので、茶の間に持ってきてテレビ見ながらはさみとのりで字書を作って

います。数カ月かけて一つ作り続け、たくさん集字帖が今も残っています。特に若いころ作った集字帖というのは、作っただけで不思議なものだで覚えているもの

です。はさみとのりで手を動かして自分で作るんです。これ絶対人に任せたら駄目です。一から十まで全部自分でやらないといけないんです。若い頃に作った集字帖は、目をつぶっていても出てくるようなところがあって本当に覚えているんです。やはり勉強するにも大事な時期というはあるものだなと思っています。

(図11) これも澄清堂帖の字書で、特にこれは「音」で全部作りました。これは「ふ」のところなんですけど、全部ひらがなの「ふ(不)」と同じですよ。これ王羲之なんです。これは漢字ですけど丸々仮名ですよ。そういうことを考えると本当に面白くて仕様がないます。この「ふ(婦)」も変体仮名でよく使います。この「ふ(服)」もあります。作品作りで特に大字かなの場合で困ったときに、王羲之の自分で作った字書、それでなければ、杭迫柏樹先生編の王羲之字典、それでも足りなければ、赤井清美先生編の行草大字典を調べて、その変体仮名として使われている漢字の崩しをもう一度拾ってみるというふうなことをして、大字かなの場合には古典をひもといています。仮名を専門にする人にとっても王羲之というのは、たぶん避けて通れないし、やはりこれはすごい古典なんだと思います。先ほどお話しした杭

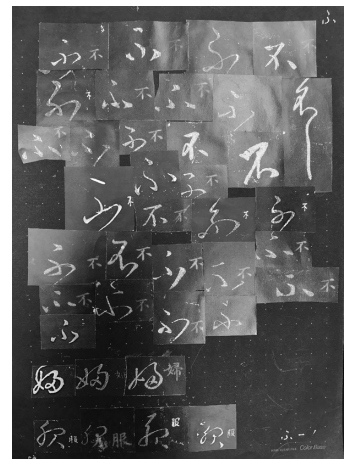


図 11

迫柏樹先生は、王羲之は白いご飯のようだとおっしゃって、それだけでは味がない、でもなくてはならない。私は、王羲之は屋台骨だと言っている。壁も何にもないけど、屋台骨がなかったら崩れちゃう。そういうことで王羲之そのものを書いてもなかなか作品にはならないけれども、そこを自分たちが考えるべきところなのかなと思っております。筆文字の中の日本の美ということで、王羲之が日本の書にどれだけ影響を及ぼしているか、私の中で王羲之というものがどういう存在であるかということをお話をさせていただきます。

(図12) これはご存じの通り、伝小野道風筆の秋萩帖の冒頭部分です。この冒頭部分と後の方は、筆者が違うと言われています。この部分は非常に有名な所です。でも私が今日お見せしたかったのはその次の画面です。

(図13) これは、秋萩帖の裏側です。秋萩帖の後ろに書かれた王羲之尺牘の臨書の部分です。私は、和様の漢字というくくりは好まないんです。和様の漢字とは何だろうと思うんです。なぜなら、和様でくくると藤原行成以後の何かひ弱な感じに思えてしまうからです。です

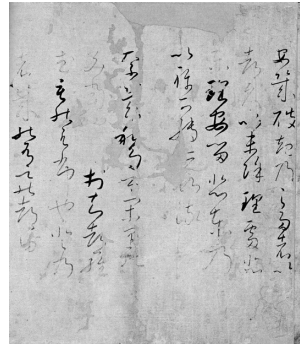


図 12

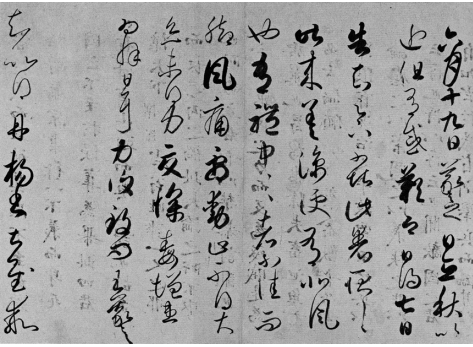


図 13

から、こうならない勉強の方法がないかと思うんです。やはり、ここにはひとつの仮名というか日本人の美意識というものが表れているのかもしれない。しかし、私だったらもっとシヤンと書きなさい！と思うんです。秋萩帖は素晴らしいものですが、臨書部分の線がひ弱なところを補うための別の勉強の方法がないだろうかと思うんです。そこで王羲之の双鉤填墨、模本はあっても真跡はないわけですから、ここは想像するしかありません。和様の書の何かひ弱なところを補うためには、やはり王羲之から取らないと何か違うことになってしまうのではないかと思ったりします。この王羲之から日本の書を見つめる中で一つお話をさせていただきます。

(図14) これは「わだつ海のかざしにさける白露の白妙の波もしゆへる淡路島」という和歌ですが、「山」が消えてるんです。実は私の弟子の田代さんにちよつといたずらしてと頼みました。最後の「山」を消しておいてと。どこに、この山があつたら一番いいと思いますか。クイズ形式で。A、B、C、Dと作ってくれたのですが、さて皆さん、どれが

II 筆文字の中の日本の美

② 仮名の魅力 ～継色紙を中心に～

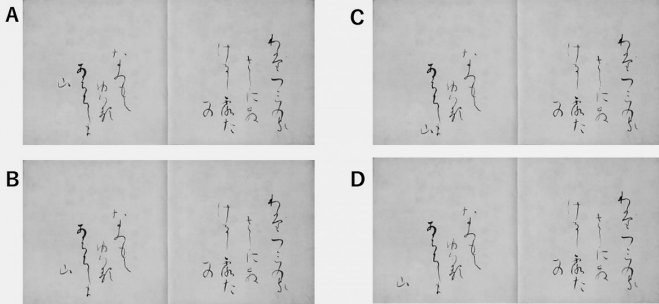


図 14

一番心地よいですか？心の中で思ってください。思いましたか。では、正解を申し上げます。Bということで、当たりましたか？ということとは、皆さん感性がとても素晴らしいということです。

それとこの「わだつ海」を書いた先人もやはり素晴らしいということですね。この山の位置一つで全然違ってくるんです。これを例えれば、これを印に変えてみたらいかがでしょう。左にだけ余白があるか、逆に右にだけ余白があるか、そんなことを考えて押すことが大切だと思うんです。

五鳳先生が、印を押す位置は一つか二つだとおっしゃっていました。大体は一カ所なのですが、時には二つあげることもあります。しかし、やはり最後の文字、あるいは最後の印というのは、全体のバランスを生かすも殺すもします。

時には、仮名のバランスが崩れたりしても印で救われたりすることもありました。そんなことで、少し遊んでみましたがこれが本当の姿です。(図15)やはりバランスが良いですね、私、ここがとても好きなんです。それになぜ継色紙が好きかと言うと、それこそてらいや威張りがありません。気張ってないんです。それこそ格好良く見せていないんです。「私、上手いでしょ」と言っていないでしょ。「私は上手なのよ。あなた

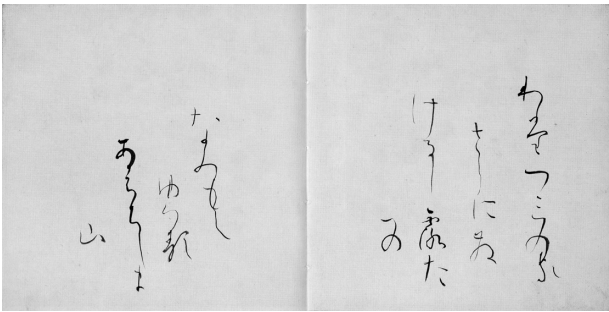


図 15

より上手いわ」とか、そういうのが全然ありません。だから、気持ちごとくても良いんですね。やはりその辺が和の世界を考えた時、いかにも和の魅力が詰まっているものではないかなと思ったりいたします。

この辺からはもう、私の独断と偏見というか、日比野五鳳先生の審美眼、美意識を借りました。ここからは、思い出話になりますが、何故ここで本阿弥光悦(図16)を持ってきたか。平安時代の古筆はいくつもございしますが、やはり鎌倉時代、武家社会となつて室町時代を迎え、多少きな臭い時代が日本もありましたね。その頃、やはり芸術というのは衰退いたします。その中で安土桃山になり、本阿弥光悦といういわゆる偉人が生まれます。

本阿弥光悦は陶器も書も歌もやるということで、高校の教科書見ても大変有名な鶴の絵が広がった、それこそみやびで華やかな巻物の作品が載っています。しかし、日比野五鳳先生は、「ほんなもん、全然あかん。光悦の和歌、ペロペロしとる。みんなあかん。光悦は手紙がよろし。手紙がよろしいわ」と言っています。

以前、小松茂美先生が『光悦書状』という本をお出しになったんですが、その本を五鳳先生が見せてくれて、「これもな、全部ええわけ

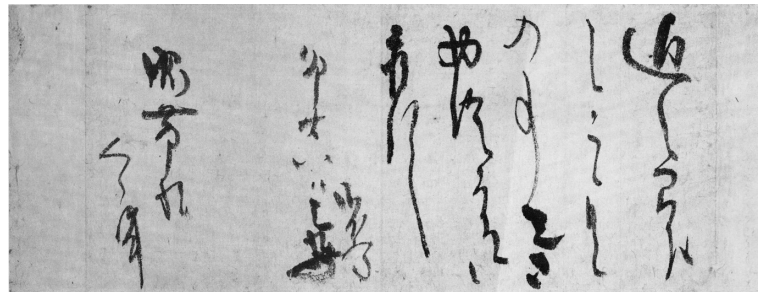


図 16

やない。これとこれと、これを勉強しな」とおっしゃったんです。

これはその中の一つなんです。そういう五鳳先生の勉強の仕方、教え方っていうのはね、「寸松庵だつて、良いところとわるいところがある。そんなもん、まねせんでええ。この寸松庵のこんな太い線は、そんなもん勉強したつてあかん」私たちは一生懸命に寸松庵を全部そっくり書こうとするでしょ。でもね、「こんなん、こんなと勉強したつてあかん」っていうふうに、古筆ももう、ほんとにいろいろとご自身の意見を持って説明して、そしてセレクトしてくださるんです。そういう勉強の仕方というのを二十代の時に学ばせてもらい、分かったか分からないかも知らなかったまま、五鳳先生だったらどう言うかなあとか考えます。例えば、古い本なんかにも五鳳先生は、いっぱい書き込んである。ここは二重丸、ここはバツと。古筆の中に書いてあるのを見せてもらったり、もらったりしました。さらの本よりも何倍も価値があるんです。ああ、五鳳先生はここを良いと思ったのか。五鳳先生はここきらいなんやったんやな。これは良いと思わなかったんだなとか。そういう五鳳先生の審美眼を古筆から学ぶことが出来て、さらの本以上の私の宝物が数冊ございます。その中の本阿弥光悦も「わび、さび」の世界と言うのではないかと思います。非常にちびた筆でね、とても味わいがあつて、卒意ではあるけれど、真つ芯を突いた味わい深い書状だと思います。ここが五鳳先生、とても好きだったわけですね。そういうことをお話したくて見て頂きました。

(図17) はい、これは皆さんが良くご存じの有名な良寛さんのお手紙です。「白雪羔少々御恵たまはりたく候 十一月四日 菓子屋三十郎殿」と書いてあります。良寛さんが白雪羔というお菓子をちよつとちよだいなというお手紙なんです。これまた、良寛さんの話

をすると長くなりますが、これがとても良いなあと思うのは、「白雪羔、少々御恵」ここをとにかく一番言いたいんです。「ちよだいな」って言っているんです。「たまはりたく候」はよく書くんですよ。

何でも良寛さんというのはご所望されますので、「くださいな、くださいな」と言う方ですから。「たまはりたく候」というのは、たぶん何回も書いていると思うんです。ですからここは、シャシャと書いています。この放ち書きと連綿のこの妙、もう私、これを見てゾクツとしました。それにこの白雪の「雪」という字、もう究極に省略されていますね。しかも、これも五鳳先生がよくおっしゃったのですけれど、仮名の場合は「右肩上がりは、いばり屋さん」て言つて怒られるんです。漢字はやはり右肩を上げて力強く書くのが常でしょうけれど、この「雪」を見てください。全部しなだれているんです。この「羔」なんて全部普通だったらずに右に上げるでしょ。この三本、全部一本一本の味わいが違って、さらに全部下がってます。これは非常に和独特なところで、五鳳先生はとても大事にされていました。「右肩を上げるな上げるな」とよくおっしゃっていました。でも、力強く書くことと思つたり、大きい字を力んで書くことと思うと右肩が上がるんですよ。それをいかんいかなと思うのですが、そこを出来るだけ下げ、争い

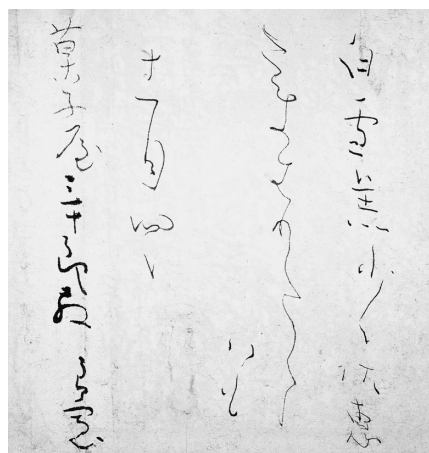


図 17

事でない、味わいの書と言うか、そういったものを表すには右肩を下げるというのは、一つこれは意識するべきところなのかなと思ったりいたします。もう一つ深掘りすると、さらに意味があるんじゃないかと思うんです。仮名というのは、これは連綿ですよ。何文字かで一つの意味が生まれる。つまり、表音文字なんです。漢字は表意ですけど、仮名は表音ですから、いくつかがあって一つの言葉として意味がやっとなまれるわけです。つながる時に右を上げたらどうでしょう。それだけ、遠回りになるでしょ。右肩を下けた方が近回りなんです。だから仮名というのは、右肩を下けた方が論理的というか、近回りになるのではないかと思ったりいたします。やはり古筆を見てもあまり右肩の上がつているものは多くない。あることはありますが、仮名の場合に限って言うとは仮名の黎明期の高野切などと比べ時代が下り、右肩が上になると少し格調が下がるかなと個人的には思いがいたします。

この放ち書きと連綿の妙、そしてこの空間。私もこれが好きで時々真似をしますが、上手くいきません。これは、私の一つの懐に入りたい美なんです。実は去年の展覧会でこの部分を真似してみようと思って試みたのですが、なかなか上手くいきませんでした。この「屋」とか「郎」はぎりぎりまで崩れているけれども崩れすぎていない。そういうところが好きなんです。そして、墨の多いところ、少ないところが絶妙ですし、これ一枚ですごく良い作品、良い手紙だなと、私の大好きな一枚なんです。ということで、筆文字の中の日本の美、書とね、漢字とは少し違う作品や古典の数々をここでお示したわけでございます。

これからの書を考える

(図18) それでは次に「これからの書を考える」ということで、会場芸術として大字かなとして、大変手前味噌ですが今年の二十人展の作品の制作意図をあまりコロナ禍でお話させていただく機会もなかったもので、少しお話をさせていただこうかなと思います。二点だけ用意させて頂きました。

「道は自然に法る」これこそ、五鳳先生の二十人展の最後は、「流水先を争わず」という四曲屏風でした。当時、五鳳先生は足腰も弱っていらして、車椅子の生活だったのですが、当時「書」で文化勲章というのは、まだどなたもいなかったんです、ところが、五鳳先生ももちろん候補になっていたのですけれども残念ながら受章とならなかった。それは、五鳳先生自身が残念だったということではなく、「書」が世の中に認められなかったということなんです。そのことに大変心を病まれていました。私たちも何か分かる気がしません？自分がどうのこうのというより、私たちが一生懸命生きていく書の世界をばかにされると物凄く腹が立つというか、極めて



図18 (第67回現代書道二十人展図録より)

辛いというか。そんなことがあり、五鳳先生は「流水先を争わず」という言葉を一生懸命に書いたんです。そうしたら、私のおばあちゃん岐阜の人なので、岐阜弁で「あの、おじいちゃん。こんなもんとくさん書いたら死んでまうで。もうやめたらええのに」と言ったら、おじいちゃんが「死んでもええから書く」と言って、本当に「流水先を争わず」を書いたんです。本当に紙の山ほどになるぐらい書いておられたそうです。

結局、足腰が立たないから、もう目をつぶって書いたと言うんです、目をつぶって。膝だけついて身体で書いたということを聞いて、それは本当に印象に残る話でありました。

そして、私は五鳳先生にあまり形のことを言われたことがないので、とにかく筆の使い方、用筆に徹底的に厳しかったんです。お稽古の帰り際に「やっちゃんな、こうやって、こうやって書くんや。こうやって書くんや」と玄関先で「こうよ。もう一回書いておいで。こうやって書くんや、こうやって書くんや」と。ですからこう形を直しなさいとか、ほとんどなかったんです。今は、ずっと五鳳先生が何を言いたかったのか。残された作品を見るにつけ、この作品はどういう筆でどういうふうに書いたらこうなるのかということを今となっては想像するしかないのですが、そんなことを常に思いながら書いています。この作品も硬い紙なのですが、おそらく薄紙で五鳳先生の書き方だったら、紙がペラペラに破れちゃうんじゃないかと思うんです。そういう五鳳先生がどんなふうに書いたかというのを想像しながら、出来るだけそれこそ奇をてらわず、王羲之の生き方、五鳳先生の生き方を心の中に置きながら、熟成させながら踏ん張って書いた一点ということになります。

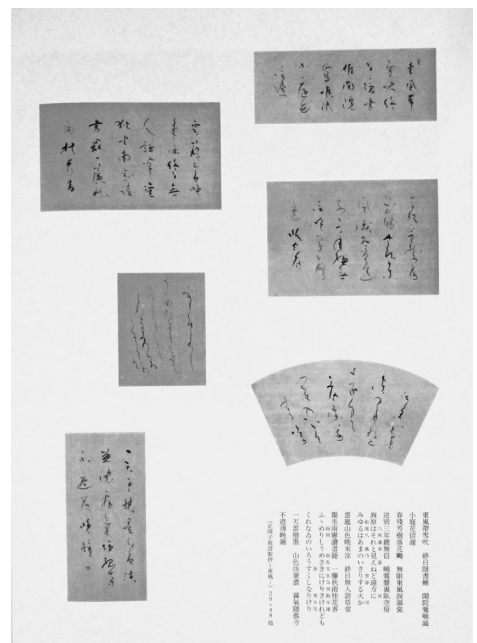


図19 (第67回現代書道二十人展図録より)

(図19) 実はこれが私の中では一番、挑戦というか、冒険というか、大きいのも挑戦ではありませんでした。どれも挑戦と言えば挑戦なのですが、これは行書、草書、草仮名、そして女手と三種類、四種類の書体を一つの作品にしたらどうなるかという実験作でありました。書いたものは、正岡子規の詩歌抄です。正岡子規は、和歌も俳句も漢詩も書いています。そういう日本の題材を用いて書いてみました。実はこれ、ご覧になった方は「あつ」と思われるかもしれないですけども、あえて制作意図には書かなかったんです。実は良寛さんの書くものは、紙はとても簡素、質素なんです。ですがパトロンの木村家がそれを紛失しないように金屏風に貼った六曲屏風がいくつかあるんです。それを以前見せて頂き、記憶にも残っていてこの作品を書きながら、もうこれは金屏風しかないと思いました。ですから、別にこの金というのは私が考えたことではなくて、私のイメージの中にあった世界を踏襲しただけなのです。

良寛さんは、漢字の行書や草書、仮名といろいろなものを書いていきます。私は、五鳳先生の影響で良寛さんの詩を昔から集めていて本も集めていました。それを見てみると、五鳳先生がどういふふうに良寛さんにひかれたかというのがすごく良く分かります。しかし、私は二十代からずっと良寛さんの字書も作ってきましたが、まだ早いと思い、今真似をしても形だけになると思って温めると言ったら言葉はきれいですが、あえて横に実は置いていました。真似をしても四十・五十代の人間が、そんなものを真似しても駄目ですから。けれど、数年前に個展で漢字の臨書をしたり、二十人展で千字文を書かせて頂いたりしたことがありました。そこで次はどうしたら良いかという事で、千字文をもう一回さらってみたのです。しかし、同じことをしては、私の思っている日本の書を書きたいという目標からするとこればかりでは違うかなと思ひ、手を広げ始めたのが米芾でした。お弟子さんにも勧めながら私も書いて、一生懸命に勉強しました。けれども、どうも米芾となると違うんです。やはりDNAは唐時代で切れています。米芾と日本の和とは何か合わない。それはやってはいけないとか、やる必要がないとかいうことでは決してないのですが、少し違うかもしれないと思いました。

そこで二、三年前からもう一回、良寛さんを目習いから始めてみようと思ひました。そして、恐る恐る発表したのがこの作品です。二十人展は、本当は正攻法の作品を出さなくてはいけないかもしれませんが、二十人展に育てて頂いているという思いが強く、多少課題が残る作品でもこれから自分がどんな方向へ進むかというところを見て頂く場所にしたいと思ひ、出品した作品です。不思議なことですが、私が会場にいた時だけかもしれませんが、東京の会場では、あまりこの作

品を見てくださる人が少なかったのです。大きな作品は見てくれるのに（笑）。逆に、関西ではこの作品をすごく見てくださる人が多かったです。そばで見ていると興味を持ってくださる作品が西と東では違うなということがあり、これは両方ともありがたいことでした。それぞれ興味というか面白いと思ってくくださる作品がばらつくということは、私の理想でありありがたいことだと思っています。来年のことも常に考え、さらに次の年に向かってこれからがんばって仕込みの時間を過ごしたいと思っています。

まとめ

どうもありがとうございました。これまでお話させて頂きましたように、書というものを大きな山に例えると、私はかなから出発しました。先生方の多くは漢字から出発されましたが、道は違えど高きに登り、頂点に向かって、書という大きな山に向ひ歩んでいるのではないかと思います。それぞれの道が違えば、それぞれの景色も違います。でも私は、書は本当に誇らしいものだと思います。昨今、日本画や洋画、工芸、彫刻の先生ともお話させて頂きますが、多くの人が日展でも書が好きとか、書の会場を見たことなかったという人がいらっしやいます。しかし、親しくさせて頂くうちに、では一回行って観てみようとなる。そうして交流を深めていくうちに、去年はこんな作品だったけれど今年はこうなんだとか、私たちが逆にお人から接することによって、この先生は去年こんな作風でも今年こうなんだと、そういうふうに交流を深めることによって分からないと思わないで、とにかく拝見させて頂く。先ほどの篆書の話もそうですが「分からない」と言ってしまうので何か見せて頂く。そして、その方の経験やいろいろ

なお話を聞かさせて頂き、書物を読ませて頂くことで共通項が見え、あるいは違いをしつかりと把握することで一層自分の立ち位置が分かる。違うところが分かることによって、より自分に分かるということがありますね。そんなことで、いろいろな方から刺激を頂き、それを糧にしながらこれから一生懸命自分の信じるところを進んでいきたいと思っております。どうぞこれを期に仮名にも興味を持って頂くことで親しくさせて頂き、これもつながりが広がっていければ良いと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。「日本の心、和の心」「筆文字の世界を通して」という演題は、これで終わらせていただきます。今日はご清聴ありがとうございました。

【講演後】

土橋先生による席上揮毫が壇上で行われ、参加者は順番に登壇し、揮毫の様子を近くで鑑賞させて頂きました。さらに書かれた作品を抽選で数名の参加者に土橋先生から直接頂きました。

土橋先生、本当にありがとうございました。



席上揮毫を順番に拝見する会員の皆様



講演される土橋靖子先生



席上揮毫する土橋靖子先生



講話に聞き入る会員の皆様

令和5年度 社員総会

日時 令和5年4月16日(日) 15時開始
会場 上野精養軒
(司会・大場大幹)

次 第

- 一、 定足数の確認 (伊藤慈恩)
- 一、 開会の辞 (小出聖州)
- 一、 会長挨拶 (西村東軒)
- 一、 議長選出 (伊場英白)
- 一、 書記任命 (小林碧桃・望月擁山)
- 一、 議 事 (議事録署名人 江原見山・伊藤慈恩)
 - (1) 令和4年度 事業報告 (下谷穂雪)
 - (2) 令和4年度 決算報告、会計監査報告 (山口香葉)
 - (3) 令和5年度 事業計画案について (下谷穂雪)
 - (4) 令和5年度 予算案について (山口香葉)
 - (8) その他 新役員、新実行委員、新理事会員、新審査会員の紹介
- 一、 書記退任
- 一、 議長退任
- 一、 閉会の辞 (宮負丁香)

令和4年度 事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
4・4・17	第1回理事会 令和4年度社員総会	役員改選の確認 令和3年度事業報告 決算報告、監査報告 令和4年度事業計画案 及び、予算案の審議 その他 懇親会(中止)	上野精養軒
6・22	第2回理事会 第1回事務局・部長会議	第64回太玄会書展 (併催 第7回学生選拔展)	上野精養軒
10・5	第2回事務局・部長会議	第64回太玄会書展 (併催 第7回学生選拔展)	上野精養軒
12・6	搬入出部	第64回太玄会書展書類搬入 12・6迄に郵送又は宅配	搬入出部長住所
12・12	第3回理事会 第2回理事会員会議	第64回太玄会書展 (併催 第7回学生選拔展) 忘年懇親会(中止)	上野精養軒
5・1・7	第64回太玄会書展 (併催 第7回学生選拔展)	作品搬入 審査(会員賞選考) 審査(準会員・公募) 陳列 初日 土橋靖子先生講演会(二〇〇人) 学生授賞式及び昼食会(中止) 授賞式、祝賀懇親会 最終日	東京都美術館
1・8	1/20・1/26		
1・9	9・30・17・30		
1・10	一般出品数 670点		
1・19	学生出品数 469点		
1・20	総出品数 1139点 (第63回展 1200点)		
1・23			
1・24			
1・26			
1・27	臨時理事会	作品搬出	東京都美術館
3・11	第5回理事会 第3回事務局・部長会議	第64回太玄会書展 (併催 第7回学生選拔展) 第65回記念太玄会書展について	上野精養軒
4・5	会計監査	会計監査	上野精養軒
4・16	令和5年度社員総会		上野精養軒

第64回太玄会書展(併催第7回学生選抜展)出品状況

☆総出品点数 1,139点

22	名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員
7	総務 監事
66	実行委員
100	理事会員
81	審査会員
112	正会員
124	準会員
158	公募
469	学生選抜

第64回太玄会書展入賞状況

5	太玄 太賞
4	太玄賞
4	全日本 書道 連盟賞
5	特別賞
4	奨励賞
10	会 新人賞
19	推選
37	準推選
31	特選
63	準特選
63	入選
454	学生 入選部

※入場者数 2324名

事務局各部活動状況報告

◎事務局 (担当 副事務局長 江原見山 大場大幹 伊藤慈恩)

4 定期総会実施、役割分担の打ち合わせ

6 令和4年度会員名簿発行

第64回太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10 第64回太玄会書展詳細の検討

7 理事会、理事会員会議、忘年懇親会への通知

7 11 牧野商会及び空間堂への第64回太玄会書展の依頼と打ち合わせ

12 本展会場打合せ 会場当番の計画と依頼 総会会場打ち合わせ

5 1 第64回太玄会書展の開催

2 令和5年度社員総会の通知の発送と集計

3 第64回太玄会書展図録の来賓等各位への送付

※年間に開催される理事会、理事会員会議、部長会、総会等会議の連絡事務

※報道関係(本展作品)(年鑑、広告)掲載に係る業務

※住所変更、退会届等受付処理業務

※本展の後援等に係る外部団体との連絡・折衝

◎会計部 (担当 山口香葉)

4 令和3年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

4 令和3年度の決算書、令和4年度の予算案作成

令和3年度会計監査受検

令和3年度決算書、令和4年度予算案報告

5 令和4年度会費納入に関する依頼書等を各社中に送付

6 令和4年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

9 会費領収書を各社中へ送付依頼

10 第64回太玄会書展に関して各部の行動予定を把握、

経費の算出及び資金の準備

11 学生表具料集計確認、公募出品料集計確認

12 第64回太玄会書展必要経費準備

5 1 第64回太玄会書展審査会における経費支払業務

第64回太玄会書展に関する経費支払業務

2 第64回太玄会書展の収支報告書作成

3 令和4年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理

令和4年度決算書、令和5年度予算案作成

令和5年度総会準備

◎事業部（担当 路野祐涯）

4 6 風雅プランニングへ出品規定・全社中の名札（役職付）・賞

札など依頼

西村先生・荒井先生に賞状依頼

7 風雅プランニングへポスター・ハガキ・書類等の印刷依頼と

校正

初出品票を各社中へ発送

8 事務用品などの確認と整理

風雅プランニングから確認用の出品規定・出品票届く

9 出品規定・出品票を各社中へ、又個人宛に送る

10 風雅プランニングから各社中・各業者へ書類発送、表具店へ

側表の張り方確認

11 風雅プランニングから社中の名札・賞札・賞状届く

5 1 東京都美術館に備品搬入、備品の整理・購入

精養軒に賞状・褒賞部依頼品など搬入

年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

◎広報部（担当 荒井湧山）

4 4 社員総会の写真撮影（4/17）

4 会報原稿編集開始・原稿依頼、ページ校正

12 理事会会員協議の写真撮影（12/11）

5 1 会員賞選考、審査の写真撮影（1/8～1/9）

第64回太玄会書展 会場・授賞式風景写真撮影

（1/20～1/26）

HP更新（令和4・4～令和5・2）

9 会報発行 編集 風雅プランニング

◎渉外接待部（担当 石井恵園）

4 11 役員、受賞者用リボン徽章の確認と補充

各書道団体に住所シールの申請と作成

12 案内状の郵送 1000枚

読売、毎日、産経、各関係団体、報道、業者

5 1 授賞式会場（精養軒）にて役員、受賞者のリボン徽章の管理、

授賞式受付、リボン徽章の保管

◎図録部（担当 小林碧桃）

第64回太玄会書展作品集

4 10 図録に係る基本方針の作成

5 1 作品撮影 352点 風雅プランニング

(審査会員以上276、会員受賞者20、準会員受賞者56)

編集 風雅プランニング

2 一回目、二回目の校正

発行部数と発送先の確認

3 図録発行、各社中事務担当者宛発送 風雅プランニング

◎搬入出部 (担当 江原紫光)

4 10 『第64回太玄会書展の書類送付に関する書類』(10/8)

(作品型式調査表・社中別出品数表・会計部より受領した払込取扱票)を各社中事務担当者に発送

1 出品票 2 出品者名簿 3 内申名簿 4 作品型式調査表

5 社中別出品数表 6 出品料払込金受領証(写)

7 制作意図説明書(キャプション原稿)を搬入出部長宅に

送付(学生部関係書類も併せて送付)

各社中事務担当者に依頼(令和4年12月6日必着にて)

12 受領した各社中提出書類を確認、整理(12/6~12/10)

整理した書類に基づき

1 社中別出品数表 2 資格別作品出品数表 3 公募出品料

受領表を作成

整理した必要書類を各事務局部長に送付

(社中別出品表、資格別作品出品数表を同封)

学生部書類を学生部長に送付

『社中別出品数表』と『資格別作品出品数表』を100部コピーし、

理事会員会で配布(12/11)

搬入出部員に作品搬入日(令和5年1月7日)の作業を郵送で依頼

5 1 作品搬入の受付事務の実施(東京都美術館 地下3階 1/7)

・作品搬入の受付

・搬入数の確認・確定(表装店8社より持ち込み)

・役職別・社中別数の確認(社中別出品者数表参照)

・出品目録・資格別作品出品数表・社中別出品数表の確定

・事務局長に報告後、審査部長に引き継ぐ

作品搬出の立会い実施(東京都美術館 地下3階 1/27)

・作品搬出の受付

・搬出数の確認・立会(表装店8社の引き取り)

・事務局長へ報告

(今回、搬入出部長は家事都合により、事務局長下谷先生と江原見山先生に確認・立会いをお願いしました)

◎審査事務局 (担当 伊藤慈恩)

4 12 第64回太玄会書展の書類搬入確認(12/11)

審査事務局処理について打ち合わせ

5 1 第64回太玄会書展審査事務局打ち合わせ、

役割分担説明(1/7)

審査手順、作品配置、成績処理について打ち合わせ

作品 670点および高校生作品73点確認、作品配置、審査場作成

出品者目録校正、入賞・入選者通知文書およびハガキ準備

審査方法打ち合わせ、役割分担確認（1／8）

電算部、風雅プランニングと打ち合わせ

会員賞選考委員による審査

会員新人賞の選考審査

特別賞、奨励賞の選考審査

太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査

太玄大賞の選考審査

入賞者代表謝辞選出

高校生の部選考審査

選考委員及び当番審査員による審査（1／9）

推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査

入賞・入選者通知文書およびハガキ作成、発送

作品管理、成績名簿作成

褒賞部へ連絡

◎陳列部（担当 長谷川香壽）

4 10 各社中事務担当者へ、陳列社中動員依頼文書を送付

12 搬入出部より社中別出品者名簿・作品型式調査票を受け取り、

出品者数・作品型式等を確認

学生部の作品点数を確認

牧野商会に出品点数（670点）を連絡し見積もりを依頼

電算部、風雅プランニングへ陳列名簿原稿作成を依頼

5 1 陳列部副部長・委員に陳列関係書類を送付

審査部より審査結果を受領・確認

電算部、風雅プランニングより陳列名簿原稿を受領

陳列計画案を作成し、牧野商会へ事前送付

牧野商会担当者、陳列部副部長と打ち合わせ

陳列日…陳列人数45名 15時陳列終了

会期中…陳列名簿が、複数回持ち去られる

キャプションの配置を調整

最終日…陳列部委員12名 15時会期終了後、

名票等の撤去及び反省会を行った

◎褒賞部（担当 小泉興起）

4 12 部長、副部長との打ち合わせ（12／11）

精養軒との打ち合わせ（12／11）

書類の作成・整理・確認、事務用品の確認と補充

松下徽章へ賞品のメダル発注

授賞式出席者の賞状筒を発注

事業部へ賞状の発送依頼（揮毫者宛）

5 1 審査終了後、受賞者の確認（1／9）

授賞式の確認（式次第、プレゼンター等）（1／9）

代表受賞者のお願い、精養軒との打ち合わせ（1／9）

授賞式出席者名簿の作成

各社中へ発送する賞状、賞品等の一覧表を作成

賞状の揮毫、確認

賞状・賞品等各社中へ発送（1／22）

授賞式会場設営、授賞式運営（1／22）

◎祝賀会部（担当 菴澤幸楓）

4 12 お知らせ発送（12／4）

精養軒と様式、予算等打合せ（12／11）

出席者制限等変更のお知らせ発送（12／24）

5 1 出席者人数集計（1／11）

精養軒と人数等打合せ（1／13）

※参加人数変更連絡は、随時精養軒へ連絡

最終人数確定、テーブル配置、席次チェック（1／20）

申込み確認リボン配布、参加者集金（1／22）

◎学 生 部（担当 鳥越新芽）

4 9 第7回学生選拔展 小・中学生、高校生の出品要項他書類

を13社中宛発送

12 書類搬入、出品一覧表、表具料振込コピー、搬入出部長より

受け取る

学年別出品点数確認（高校生（73点）、中学生（147点）、小学生（249点） 計469点）

電算部 望月部長に出品一覧表提出

風雅プランニングに入選者名一覧の発注

5 1 搬入日 作品点数確認 学年別仕分け

陳列日 小・中学生の部、学年別に三段掛けで展示

（23・24室使用）

証発送 各社中宛入選証、入選者名一覧仕分け

発送は褒賞部に依頼

最終日 15時より軸をおろす

◎電 算 部（担当 望月擁山）

4 4 会員データ受領、管理開始

5 社中・資格別リスト（年会費納付用）作成

7 会員名簿用データを作成

8 第64回太玄会書展出品票用データを作成

第64回太玄会書展出品者名簿を作成

12 学生展出品者名簿を作成

審査事務局に会員受賞履歴データを送付

受賞者データを作成

5 1 受賞者データを風雅プランニング・読売新聞社・褒賞部に通知

出品者・入選者一覧（配布用印刷物・パネル）校正

2 第64回太玄会書展終了に伴いホームページの更新

年間を通して会員データ・ホームページの更新

令和5年度 事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
5・4・16	第1回理事会 第1回理事委員会 令和5年度社員総会	一部役員改選の確認 令和4年度事業報告、 決算報告、監査報告、 令和5年度事業計画案及び 予算案の審議、その他	上野精養軒
6・21	第2回理事会	第65回記念太玄会書展 (併催第8回学生選抜展)	上野精養軒
10・4	第1回事務局・部長会議 第2回事務局・部長会議	第65回記念太玄会書展 (併催第8回学生選抜展)	上野精養軒
12・3	搬入出部 第3回理事会 第2回理事委員会 忘年懇親会	第65回記念太玄会書展 第65回記念太玄会書展 第65回記念太玄会書展 (併催第8回学生選抜展)	上野精養軒
6・1・7 1・8 1・9 1・9 1・20 1・21 1・2019	第65回記念太玄会書展 (併催第8回学生選抜展) 1/20 1/26 1/9 1/17 1/30 1/22(月) 開館 講演会 席上揮毫(未定) 作品解説(未定)	作品搬入 審査(準会員・公募) 審査(会員賞選考) 第3回理事会 (第4回運営委員会) 陳列 初日 学生選抜展(高校生の部)授賞式 授賞式、祝賀懇親会 最終日	東京都美術館 東京都美術館 上野精養軒
1・27		作品搬出	東京都美術館
3・9	第5回理事会 第3回事務局・部長会議	第65回記念太玄会書展総括 (併催第8回学生選抜展) 第66回太玄会書展について	上野精養軒
4月上旬	会計監査		上野精養軒
4・21	令和6年度社員総会		上野精養軒

令和5年度 役員構成

常任顧問	福田 丞洲	笠原 聖雲	垣内 楊石
会長	石川 流芳		
副会長	西村 東軒		
理事	落野 雅宣	宮負 丁香	金丸 鬼山
理事	鈴木 暎華	瀧沢 曲峰	小原 天簫
理事	伊東 玲翠	高橋 心行	
理事	伊場 英白		
副理事長	小出 聖州	飛田 冲曠	
事務局長	下谷 蕪雪		
副事務局長	江原 見山	大場 大幹	伊藤 慈恩
理事	西村 東軒	落野 雅宣	宮負 丁香
	金丸 鬼山	伊場 英白	小出 聖州
	飛田 冲曠	下谷 蕪雪	江原 見山
	大場 大幹	海野 十方	垣内 蘭畦
	伊藤 慈恩		
監事	志村 恵風	小林 紫雲	
総務	石島 廻山	植木 蒼穹	中尾 勝子
	中田 珪川	堀越 壽崑	

実行委員

會田春燕 浅香麗芳 足達紫鳳 新井清玉

荒井湧山 石井蕙園 石井珠翠 石坂翔鳳

伊藤桐花 菴澤幸楓 植村曉恵 大河原由佳

大木暁峰 大窪昇鶴 大竹伯燿 笠井津仙

柏原桂雪 亀ヶ谷深翠 川端敏江 倉持栄秋

黒川白嶺 小泉香園 小泉興起 小林桂葉

小林碧桃 小山泰雲 近藤寿泉 笹井芝雪

佐々木恵陽 佐々木幸葉 嶋田白染 清水美代子

鈴木竹園 須田瑞兆 清宮白鷺 高山爽快

滝澤聖華 田中恵康 田中柳惲 柘植金瑠

時田大祥 富山虎跑 鳥越新芽 並木金紫

南部碧章 西谷香峰 橋本春溪 長谷川溪華

長谷川香濤 備前 徹 落野祐涯 藤岡悠苑

増永楊蘭 松橋多恵 南 溪石 三根揚輝

宮嶋吾風 宮本芳秀 三好凌香 望月擁山

山口杏園 山口香葉 山崎翠風 山崎洋子

山本白鷗 吉田恵子 吉村清志

理事 青木芳濤 天寺雅良 池田紅華 石井瑗泉

石井滂翠 板垣芳蘭 板倉建昇 市川志玉

伊藤紫粹 伊藤遙山 岩井壹龍 宇野靜香

遠藤鈴響 大木操守 太田翠華 太田芳琴

大畑晃翠 岡崎翠晃 小田堤翠 小野敏之

小俣柏翠 垣内玉華 勝又慶竹 加藤径石

金子慈祥 釜田 響 嘉門瑤泉 川井韶瑞

川上白鳳 川谷淳子 川津恵鮮 川名僊苑

川本景月 菊地梨祥 菊野白濤 窪田好華

倉田桂華 倉持茜祥 栗田伯陽 黒川虚白

小林まこ子 小林嶺風 小宮柳岱 佐久間輝珠

佐藤北峰 下島東僊 春藤真紀 白崎信園

末永照英 杉浦華英 杉本英華 杉本雅峰

鈴木恵理 鈴木春岨 鈴木翠汪 妹尾敏子

高橋興舉 高橋心華 宝田曉蓮 竹内游月

田中華苑 田中盛觀 田辺水月 谷本藍泉

坪川九翠 内藤秋麗 中垣郁芳 中川蘭葉

中西甫子 中山高鳳 西沢薫風 林 韶舞

林 賢子 羽山多望 原田彩翠 日置雅有

弘田長風 落野研涯 福田節子 星野遙涯

細田耕仙 堀 桃泉 本間杏雪 真溪玲泉

松口翠葉 松田爽花 三岡翠風 皆川蘭香

宮原真玄 村上舩舟 森 鶉石 山内紀隆

山崎寛齋 山崎琇園 山崎のり子 山地暁翠

山田光倫 山田騰沸 湯浅瑞雲 横山恵華

吉田景雲 米山玄穹 渡辺玲雲

第64回太玄会書展 入賞または社中の推選による昇格者

第64回太玄会書展入賞による実行委員へ5名

伊藤桐花 大竹伯耀 鈴木竹園 備前 徹 松橋多恵

理事会員へ8名

太田翠華 金子慈祥 釜田 響 鈴木翠汪 中川蘭葉 真溪玲泉
山崎のり子 米山玄穹

審査会員へ7名

飯田歌林 小暮兆琳 下間佳璋 高崎梅仙 高野秀影 中澤澄心
茂木朱櫻

正会員へ10名

井出隆鳳 毛塚佳泉 古谷野星麗 坂 智大 中村丹裳 西方勇玆
西原彩華 福塚光徳 藤平玉峯 藤原光水

準会員へ26名

井内淑恵 池田華遙 伊藤兆菜 大井綾華 大川華風 岡本美佳
小澤桐洋 金丸華山 狩生久美子 小池礼凌 佐藤 英 佐藤榮壽
杉山香雨 染谷君恵 高橋幸江 高柳浩美 田中春暉 藤沢貞行

御田村翠玉 山浦柚美 山上尚子 横瀬晃子 横瀬克江 綿内良子
渡邊青羅 渡辺抱琴

令和5年 事務局構成

事務局長	下谷 蕪雪	大場 大幹
副事務局長	江 原 見 山	
会 計 部	伊 藤 慈 恩	
事 業 部	山 口 香 葉	
広 報 部	露 野 祐 涯	
渉外接待部	荒 井 湧 山	
図 録 部	石 井 蕙 園	
搬入出部	小 林 碧 桃	
審査事務局	江 原 見 山	
陳 列 部	伊 藤 慈 恩	
褒 賞 部	長谷川 香 濤	
祝賀会部	小 泉 興 起	
学 生 部	菴 澤 幸 楓	
電 算 部	鳥 越 新 芽	
	望 月 擁 山	

令和5年度 総会風景

令和5年4月16日(日) 会場：上野精養軒



議長
伊場英白 理事長



開会の辞
小出聖州 副会長



挨拶
西村東軒 会長



総会風景



総会に参加した会員の皆様



司会進行
大場大幹 副事務局長



閉会の辞
宮負丁香 副会長



総会風景

太玄会所属団体のこの一年の活動（令和4年5月～令和5年4月）

書星会

第70回記念書星展

会期 令和4年11月10日(木)～11月16日(水)
会場 東京都美術館
代表者 宮 貢 丁 香

記念展の企画として、浅見喜舟先生始め歴代役員作品25点を展示しました。入場者2000人余り。作品597点、課題折帖69点展示しました。

第74回千葉県小・中・高校書き初め展

会期 令和5年2月14日(火)～2月19日(日)
会場 千葉県立美術館
代表者 宮 貢 丁 香

お正月の行事の書き初め展は、多くの千葉県小・中・高校の参加で10万点を超える出品がありました。1月に各地域で審査を行い、2月に書星会で最終審査があり、「千葉県知事賞」を始めとする優秀作品75点を含む335点が千葉県立美術館に飾られました。会場はご家族で鑑賞される方もおり、にぎやかでした。

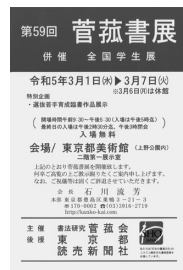
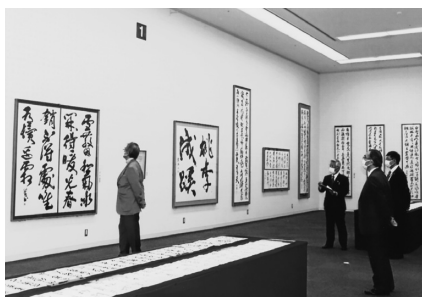


菅菰会

第59回菅菰書展 併催 全国学生展

会期 令和5年3月1日(水)～3月7日(火)
会場 東京都美術館
代表者 石 川 流 芳

今回、第59回菅菰書展はコロナも落ち着き学生部の授賞式は中止にしましたが、一般部は授賞式、祝賀会と規模こそ小さくしましたが、コロナ以前にはほぼ戻った形で開催できました。来賓の方々、会員一同久しぶりの為、大変盛会でした。展覧会も今回新たに幹部の調和体コーナーを設けたところご好評を頂き一同大変励みになりました。来年は60回記念展ですので、一層良い展覧会にしたいと思います。



鍊成会
会

会 期 令和5年4月3日(日)
及び7月17日(日)

会場 鶯毛堂鍊成会場（南浦和）

研友社では、錬成会を春と夏の2回、南浦和の「鶯毛堂錬成会場」

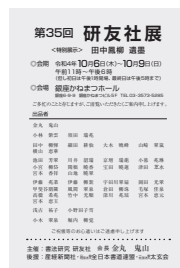
を借用して開催しております。

4月には産経国際書展に向けて、7月は研友社展や太玄会書展に向けての作品制作を中心として実施しています。

鍊成会は、いつもの

書道教室で指導を頂い

ている先生以外の先生



研友誌上でしか知り

えない会員相互の交



真仙会

第56回真仙会書展

会期 令和5年5月12日(金)

～5月16日(火)

会場 ながの東急百貨店

本館5階 催事場

代表者 小出 聖州

第56回真仙会書展が令和5年5月12日から16日まで、ながの東急百貨店本館5階催事場にて開催されました。出品点数は140点。

祝賀パーティーも5月14日にホテルメトロポリタン長野で開催されました。第1部は書道講演会。太玄会会長西村東軒先生をお招きし、梅原清山先生に関わる貴重なお話を熱く講演されました。会員一同、熱心に拝聴致しました。第2部は懇親会。会員相互の親睦を笑顔で深め合うことが出来ました。



鳥跡会

書研社

第43回書研社展

会期 令和5年3月24日(金)～3月26日(日)

会場 アミコシビックセンター

3階ギャラリー(徳島市)

代表者 中尾 勝子

書研社は、故 田中双鶴先生が創設された書道結社です。漢字も仮名も書けることを目標としてきましたので23名の会員が漢字、仮名、調和体、臨書作品等を出品しました。

昨年6月より毎月1回、広い会場を借りて錬成会を行い、太玄会書展と書研社展にそなえました。太玄会書展に出品した高校生の作品や小・中学生の作品もコーナーを設けて飾り、バラエティーに富んだ展覧会となりました。



会期 令和4年9月4日(日)

会場 春日会館

代表者 中尾 勝子

鳥跡会は一心会、耿の会、書研社、
三つの会の合同体です。

日頃は各会がそれぞれの計画や目標に向かって錬成していますが、年に一度三つの会が集つて太玄会書展に向けての錬成会をしています。

一心会、耿の会は漢字が主流ですが、書研社は仮名系の方が少し多いかと思えます。

コロナがまだまだ下火にならない中、9月4日に合同の錬成会を行いました。

第28回耿の会書作展

会期 令和4年4月1日(金)

4月3日(日)

会場 徳島県立文学書道館

代表者 弘田長風

「書源」という書道雑誌への出品を中心に定期的に錬成会を実施してきました。さらに外部展への出品という刺激を感じながら、「会員が書道への心身の向上を」と、がんばっています。臨書や創作、漢字



や漢字仮名交じり文、大小作品など。練習の成果を発表することができました。



九龍社

第62回九龍社書展・学生部展

会期 令和5年2月3日(金)

2月5日(日)

会場 福井県立美術館

代表者 垣内 楊石

令和4年度の九龍社書展

は、全員が臨書あるいは倣書作品を発表する企画でした。

それぞれが自分の作品創作の際に取り入れたいと思う法帖を選んで、その書法、



(酒品書)					
東坡酒集	魏野志	趙鼎紅華	石堂叢書	數知堂	
內莊武庫	屈宜孫	趙一庵	酒內玉	海內輯文	
內莊園圖	張翥亭	載舟香月	蘭門叢書	香月齋詩	
之船墨譜	之村知新	蔡修伯	黑田金白	漢川白	
金・玉堂	張鑑其	臨澤雪堂	白雲隱居	高本堂月	
高麗玉堂	高麗華亭	竹月吟齋	竹月吟齋	竹本齋	
中興事紀	王元玉	冠廷本月	王元玉	榮陽子	
中興節志	張慎德	張慎德	中興事紀	西村智賢	
飲水齋詩	楊春泰詩	李 奇志	林 曉	張國芳	
飲水齋書	張慎德	蘇州詩集	韓 曉	張國芳	
陸清堂集	楊春泰	吳汝詩	陸清堂	彭本堂	
三和齋	許齊泰	三和齋	蘇 詩	森隱齋	
山水圖	張慎德	張大詩	蘇 詩	森隱齋	

＜九龍社會服務處＞
區 內 關 稅 08776-22-6240
＜學生部事務處＞
查 驗 站 08726-83-1330

取り組んだ法帖が様々で、しかも大作が多く変化に富んだ見応えのある展覧会となりました。

一所懸命に書かれた学生の作品も同時に展示され、親子連れの来場者で賑わいました。

会 期 令和4年5月22日(日)～12月11日(日)

会場 ふれあいみんなの館・さばえ

代表者 垣内 楊石

コロナ感染予防のため

め、昨年度に引き続き午
前中のみの研修会となり
ました。研修会は、各自
が書いた臨書作品を持ち
寄り、垣内楊石先生の講
評を聞いて学ぶことから
始まりました。続けて、



それぞれが鑑別、講評、添削の指導を受けました。先生が実際に書いて見せて下さる場面もありました。

参加者は、皆の指導を受ける様子を見ることができ、よい学習の場となっていました。

書研社

第45回記念書研社展

会期 令和4年9月20日(火)

9月25日(日)

会場 銀座大黒屋ギャラリー

代表者 植木蒼穹

書研社展は、45回目を迎えた。今展は『風』をテーマとし、各人がテーマに沿っての創作を試みた。会員22名が参加。臨書も含め31点を展示する。加えて寸松庵色紙大の小作品21点も並べて楽しんだ。

書研社鍊成会

会期 令和5年4月23日(日)

会場 西葛西仲町会館

代表者 植木蒼穹

薫風渡る一日、会員一同思い思いの
大作に励み、充実した時間を共有した。

[illegible]

青龍會

第53回青龍書展・青龍學生展

会期 令和5年4月22日(土)

4月24日(月)

会場 すみだりバーサイドギャラリー

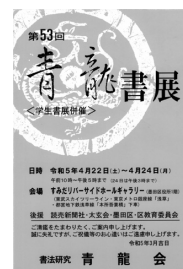
代表者 下谷 蘓 雪

会場内は会員各人の思いを込めた、個性あふれる力作が壁面を飾り、訪れた方々と会員との会話も弾み、高友社らしい明るい華やかな空気が

前回までコロナで開催が出来ない年は、誌上展を行っていました。コロナが落ち着いた今年は通常開催となりました。

会場スペースが例年より少なくなり、一般部の作品を小さくしたところ、会場はすっきり綺麗に展示されましたが、2×8尺作品が無い会場はやっぱり寂しいものとなりました。

ご来場いただいた先生方からもご指摘があり、早速来年は通常に戻すことが決まりました。ご指導に感謝いたします。



燎原社

第57回燎原社書展

会期 令和4年9月24日(土)

～9月25日(日)

会場 北千住シアター1010

代表者 堀越壽崙



今展覽会は、故 佐渡壽峰先生生誕百年を迎え回顧展を併設しました。佐渡先生の遺墨を多数展示したコーナーは盛況で、作品抜粋に苦心した甲斐がありました。今年の課題「聲」「聴」「響」は、各自の個性が出て恒例の楽しみとなっており好評でした。



令和5年度太玄会所属団体の活動予定

団体名	代表者	活動内容	開催日時	会 場
書星会	宮 負 丁 香	第71回書星展 第75回千葉県小・中・高校 書き初め展	11月10日(金)～11月16日(木) 2月	東京都美術館 千葉県立美術館
菅菰会	石 川 流 芳	第60回記念菅菰書展 併催全国学生展	2月29日(木)～3月7日(木)	東京都美術館
研友社	金 丸 鬼 山	第36回研友社展 錬成会	10月9日(月)～10月14日(土) 6月18日(日)及び9月10日(日)	日本橋「小津ギャラリー」 鷺毛堂錬成会場
真仙会	小 出 聖 州	第56回真仙会書道展	5月12日(金)～5月16日(火)	ながの東急百貨店本館5階催事場
鳥跡会	中 尾 勝 子	第44回書研社展	3月22日(金)～3月24日(日)	徳島市アミコシビックセンター ギャラリー
	弘 田 長 風	鳥跡会合同錬成会 第29回歌の会書作展	9月10日(日) 5月26日(金)～5月28日(日)	春日会館 徳島県立文学書道館
九 龍 社	垣 内 楊 石	第63回九龍社書展・学生部展 九龍社研修会	6月16日(金)～6月8日(日) 4月23日(日)～11月19日(日)	福井県立美術館 ふれあいみんなの館・さばえ
書 研 社	植 木 蒼 穹	第46回書研社展	9月19日(火)～9月24日(日)	銀座 大黒屋ギャラリー
高 友 社	落 野 雅 宣	第45回記念高友社書展	4月15日(月)～4月19日(金)	上野の森美術館1階及びギャラリー
青 龍 会	下 谷 蕪 雪	第54回青龍書展・青龍学生展	4月26日(金)～4月29日(月)	すみだリバーサイドギャラリー
燎 原 社	堀 越 壽 嵩	第58回燎原社書展	9月9日(土)～9月10日(日)	シアター110110ギャラリー 北千住マルイ11階

第64回太玄会書展 受賞者の言葉

太玄大賞を受賞して



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

高友社 伊藤 桐花

令和五年一月八日夕、突然の師（落野雅宣先生）からの電話であった。
「今、会員賞の選考が終わった所なんだ」

何故か言い淀む師。短い沈黙。いやな予感がした。十年程前、私は審査事務部の部長で、その場の隅にいて、自作の無惨な結果を目の当たりにした。けれど師はそれ以降もずっと私の作を推して下さっていると、風の便りに聞く。辛抱強い師、会のお仲間への申し訳なさ、何より未熟な自分への憤り、ほんの数秒間に、種々の思いが交錯した。

「太玄大賞になったよ…」

しばらくはお返しする言葉が見つからなかった。私の書歴は四十五年を越えたが、大賞受賞という栄誉を賜る日が来ようとは、夢のまた夢の出来事と思えた。書の道で、これ程長き歳月を歩んで来られたのは、二人の師匠（落野高涯、雅宣先生）のおかげである。簡単に「おかげ」という言葉のみでは言い表せないが、師が指し示し開いて下さ

った道を、ただひたすら愚直に歩み続けてきた。そしてこれからも、精一杯真面目に進んでいきたいと思う。

太玄大賞を受賞して



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

菅菰会 大竹 伯耀

この度は、第六十四回太玄会書展におきまして太玄大賞という栄えある賞を戴き、誠にありがとうございました。師である佐々木恵陽先生から受賞の連絡を頂いた時は、本当に信じられない思いでいっぱいになりました。長年に渡りご指導頂きました佐々木恵陽先生・佐々木幸葉先生・諸先輩方、そして審査に当たられた諸先生方に心より感謝致します。

今回、常にご指摘頂いている早書きによる作品の軽さを出さぬよう、墨量・余白・造形の構成に注力致しました。まだまだ力不足ではありますが、毎回展覧会場で自分の作品の前に立つと感じる軽さ、弱さが若干軽減されていたのではないかと考えております。

コロナ、インフルエンザのダブル流行等もあり、まだまだ生活に落ち着きは戻りませんが、今後も古典の研鑽を重ね、少しでも師の背中に近づけるよう、目標を定め精進して参ります。今回の受賞につき、本当にありがとうございました。今後とも宜しくお願い致します。

太玄大賞を受賞して



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

書星会 鈴木 竹園

この度は身に余る栄誉を賜り、恐縮に存じます。

今年こそはと気合を込めて作品制作に励みました。線は深く強靱に、そして変化多彩なものとなるようにと願い、反故を重ねました。

結果として太玄大賞を受賞することができましたが、これは自分一人の力ではなく、日頃からご指導頂いている宮負先生や、審査に当たられた先生方、そして周囲の皆様のお陰です。この場をお借りして御礼申し上げます。

今後は歴史ある太玄会をさらに盛り上げるべく、自身ができることを模索しながら貢献して参りたいと考えております。先ずは後進の育成が喫緊の課題と感じますので、一人でも多く、書を愛好する人を増やせるよう、取り組む所存です。

その為にも、自身の精進は欠かすことのできないものです。今後とも皆様方のご指導ご鞭撻を宜しくお願いいたします。

太玄大賞受賞の御礼



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

書人社 備前 徹

この度、第六十四回太玄会書展におきまして図らずも太玄大賞をいただきました。誠にありがとうございます。作品提出の期限まで、故梅原清山先生からは「線が生きていない」とのご批評をいただいておりますので、受賞のご連絡をいただいても「まさか私が？」という思いしもなく、晴れやかな授賞式にまいりましてようやく実感が湧いてきたところでございました。

このような賞をいただくことができましたのも、ひとえに梅原先生のご指導と書人社のみなさま方の励ましによるものと、大変ありがとうございました。

今後はこの賞に恥じない作品を書けるよう気持ちを引き締めて取り組んでまいりたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

太玄大賞をいただいて



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

真仙会 松橋多恵

この度伝統ある第六十四回太玄会書展におきまして思いもよらない大賞をいただき驚きとうれしさで一杯です。これも偏に審査にあたられました諸先生方、恩師関吾心先生のおかげと心より感謝とお礼を申し上げます。

いつも力強さと書品の高さを胸に作品作りを心掛けておりますが、今回はさらに墨量豊かに強さと張りのある雰囲気作りを目指しました。欠点ばかりが目につき意のようには至らず未熟さ、力の無さを痛感しております。

今回の受賞に恥じることのないよう更なる向上を目指して一層の努力と精進を重ね書の道を深めて行きたいと思っております。

変わらぬご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

継続は力なり



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

書星会 金子慈祥

第六十四回太玄会書展は、当番審査員にも当たっております。滞りなく審査を終えることができるか、只々そればかりを考えていましたので、「太玄賞」と知らされた時は驚きしかありませんでした。墨量が少なく弱い線や構成の悪さなど日頃から指摘され、次はもっと思い切つてと紙に向かうものの、思うようにはいかない連続。課題山積みですが一つ一つ丁寧に指導下さいます宮負先生、また支えて下さる諸先生方や書友の皆様のお陰と深く感謝いたします。有難うございます。

『継続は力なり』といいますが、時に続けることの難しさも感じます。今回の受賞を励みに、一本でも多くスカッとした線が引けるよう、また、初心に立ち返って勉強を重ねたいと思います。今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

有難うございました



第六十四回太玄会書展 太玄賞受賞

高友社 鈴木翠汪

雅宣先生、第六十四回太玄会書展受賞の連絡を頂いた際、先生は大変喜んでくださったのに素直に喜ばなくて失礼いたしました。

高友社の現理事長をしている露野雅宣先生は四十七年前、住んでいる所の自治会、文化部の中の書道サークル設立時よりこれまでずっと指導を続けてくれています。当時私は、友人からの誘いで軽い気持ちで入会しました。

雅宣先生の指導は、競書誌の中の半切は全員同じ課題に対し、生徒一人ひとりの特徴を捉え全員の前で素晴らしい技術を披露し、個々に合ったお手本を書きあげ熱心な指導をしてくれます。また、サークルメンバーとはみんな和気藹々と切磋琢磨してきたことで、長く続けてくることが出来、今回は過分な賞を受賞することとなりました。

雅宣先生、サークルの皆さんのおかげです。大変感謝しております。有難うございました。

受賞の喜び

第六十四回太玄会書展 太玄賞受賞

九龍社 真溪玲泉

小学校の時から私は字を書く事が大好きでした。六年生の時突然、福井大震災に出合い学校も全壊し、何もかもすべて失って辛い状態の中、今でも忘れられません。そんな中で両親から元気に育てられて家はなくても幸せでした。書く事が大好きだったので少しづつ始め、そして本格的に先生に習い始めてから書の難しさ、辛い事等もありました。展覧会には、良い作品を出品したい。辞めたら終わってしまう。自分の心に負けぬようにとムチを打ち、休むことなく出品もして、大変な事にも出会ったり上手に書けずに悲しくもあり、でもここで止めたら終わり。今日まで敗けずに頑張り続け、うれしい賞を頂きました。待ち望んでいた太玄賞を頂く事が出来、夢のようです。心から先生を始め皆様に御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

合掌



書道という登り坂



第六十四回太玄会書展 太玄賞受賞

真仙会 山崎 のり子

第六十四回太玄会書展において、太玄賞という大きな賞を頂き、誠にありがとうございました。これも偏に、日頃ご指導、ご支援してくださる真仙会の諸先生方、会員の皆様のお陰と厚く御礼申し上げます。

太玄会書展では圧倒的に漢字作品が多く、その中であって少数派のかな作品が、いかに主張できるかが毎年の課題となっています。

「優美さの中にも力強さを」をコンセプトに作品に向き合っていますが、いつも作品を前にして思うことは、「優美さがない」ということです。直線と曲線をうまく融合させ、文字を直線的に配置しなくても、線の流れにより、上から下に流れるように見えること、墨色の変化や余白も作品の一部として利用する等、数十年もかなを習いながらようやくわかってきたことです。まだ書道という坂の登りに立っている状況ですが、師の指導の下、更に研鑽を積みながらこの長い坂を登って参りたいと思います。今後ともご指導ご支援のほどよろしくお願い致します。

受賞の御礼



第六十四回太玄会書展 全日本書道連盟賞

書星会 太田 翠華

この度、第六十四回太玄会書展に於いて、全日本書道連盟賞を受賞させていただきました誠にありがとうございました。

思いもしなかった大きな賞に驚きと感謝の気持ち、そして身の引き締まる思いで一杯です。これも偏に諸先生方、社中の先生のお蔭と感謝致しております。

作品づくりでは、運腕大きく伸びやかな線をと思い取り組んだのですが、日頃の勉強不足がたたたり、課題が多く残った作品となりました。この受賞で一步踏み出す勇氣と励ましを与えて下さいました事、大変うれしく思っております。奥深い書の道、心新たに日々精進し、楽しみながら歩んで行く所存です。

全日本書道連盟賞を受賞して



第六十四回太玄会書展 全日本書道連盟賞

菅孤会 釜田 響

この度、第六十四回太玄会書展において全日本書道連盟賞という思いもかけない知らせを受け、身が引き締まる思いになりました。

このような栄えある賞を戴けましたのも、佐々木恵陽先生、佐々木幸葉をはじめ菅孤会の諸先生方、諸先輩方のご指導のお蔭と深く感謝しております。

師匠佐々木先生の下へ通い始めて、およそ三十余年。学生の頃は作品提出が遅く、ご自宅の稽古場を深夜まで解放していただき、根気強く励ましそして時には厳しくも温かい眼差しで見守って下さいました。現在は妻と二人の子供もご指導を仰ぎ、書の道を歩んでおります。

これからもこの賞に恥じぬよう引き続き精進してまいりますので、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻どうぞよろしくお願い申し上げます。

この度の受賞、どうもありがとうございました。

感謝



第六十四回太玄会書展 全日本書道連盟賞

書人杜 中川 蘭 葉

このたび第六十四回太玄会書展において、全日本書道連盟賞を受賞させて頂きました。これも太玄会を支えてくださっている先生方のおかげだと思っております。本当にありがとうございます。

今回の作品は、七言の対句を対聯で、六朝楷書にて取り組みました。楷書でありながら行書のような線の流れ、力強さの中にやわらかさを出す事に気を配っております。そして上聯、下聯のバランスを取る事、墨をのせる箇所や渴筆を上手く利用し、対聯となった時に美しく見えるよう制作にあたりました。しかし会場で見ると反省点が多く、勉強不足を痛感しております。今後はより多くのかたの作品を見て、自らの作品作りに生かしていきたいと思っております。

一月二十五日、恩師梅原清山先生が逝去されました。小学校一年で初めて筆を持った時から梅原先生の字をお手本に書道が続けて参りました。今回頂いた賞は、「これからも書道が続けていきなさい」と背中を押して頂いたように感じております。感謝申し上げますと共に心よりお悔やみ申し上げます。

改めて、これまで太玄会書展を守ってこられた先生方に感謝し、これからの発展のため微力ながらお役に立ちたいと思っております。今後どうぞよろしくお願い申し上げます。

受賞の御礼

第六十四回太玄会書展 全日本書道連盟賞

書星会 米 山 玄 穹



太玄会書展には「昭和」の終わりから出品し始め、「平成」では宇津木雀聲先生の名代として千葉県での研修旅行のお手伝いをさせて頂いたこともありました。そして「令和」のこの度、全日本書道連盟賞を頂戴し誠に有難うございました。御指導頂きました先生方に感謝申し上げます。

授賞式の御挨拶の中で、「会のために何ができるか」との御言葉がありました。今後は更なる研鑽を重ねると共に、甚だ微力乍ら会の発展の為に尽力させて頂きたく存じます。

特集

わが師 落野高涯先生との思い出



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

高友社 伊藤 桐花

古稀を過ぎた現在まで、書を仕事として続けている、とは思ってもしなかつたことでした。先生が逝かれて、早や四十年近くの歳月が流れました。先生との思い出は、私の書との関わり、私の書の歴史です。

I 入門（昭和五十一年・十一月）1976

きっかけは、私が母に「近所でお習字を習いたい」と話した事から始まりました。実家は祖父の代から下町で生花商を営んでおり、お客様の一人から「よい先生」の話を聞いての、口コミでした。

大学を出て、大手商社入社二年目。仕事にも慣れた憧れのOL生活でしたが、毎日の生活に潤いのなさを感じていました。当時、社内では横書き、漢字、カタカナのみ使用可で、ひらがなは厳禁でした。「ひらがな」を書きたい、そんな渴望からの入門でした。

初対面の時、二階のお稽古場に上がっていくと、白髪で小柄、大き

なマスクをした、その上には眼光鋭い大きな目、無口で神経質そうで、

話しかけたら叱られそうな、いかにも怖い老人が座っていたらしいまました。後年、その時は風邪を引いていて、かなり体調が悪かつたのだと回想されました。



落野高涯先生

II 開塾（昭和五十五年・二月）1980

最悪の出会いではありませんでしたが、先生の書に關しての譲らぬ厳しさ、折に触れて垣間見える、人情味溢れる優しさに接する度、心引かれていきました。多くのお弟子さん達も同様だったと思います。

入門より一年半程経った昭和五十三年五月、会社を三年で辞めました。退社を目前に控えたある日、先生が唐突に「ところで武藤（私の旧姓）、いつウチに来てくれる？」と切り出されたのです。前から、退社したら先生のお宅へお手伝いに来て、というお誘いはありましたが、それが本当に先生がおっしゃるとは。私は内心、嬉しくて心躍らせ、天にも昇る気持ちでした。

毎水曜朝十時、お宅に伺い、お稽古場の掃除、お稽古の準備をして、昼食の手伝いをして…お稽古の時間ともなると、二百人からの生徒さ

んが出入りして、大混雑の場と化しました。お手本や添削待ちの生徒さんの交通整理、時には二階をお稽古場に変身させたり、玄関に溢れた靴をビニールに詰めたり、と慌ただしい喧騒の中で、手早くお手本をお書きになる先生。「お手本書きにはスピードが大事」と先生の横でアシスタントをする私に、手本の書き方だけでなく、時に書のよもやま話や文房四宝について教えて下さるのでした。

お手伝いに何うようになってから数ヶ月後、先生から「書道塾をやってみる気はないか？」と持ちかけられました。この話が出た時、家族には直後に相談しました。前述の如く、家業は生花商で「生け花」を叔母が教えておりました。お花のお稽古日と重ならなければ、ということで全員が賛成してくれました。けれど私は「書を教える」という事に自信がなく、決断できませんでした。そんな私に「先生がついているじゃないか」とおっしゃって、奥から白紙を出して「生徒募集」の張り紙を筆でさつとお書きになり、その上教室名までも即座に『竜泉書道教室』と定めて書き入れたのでした。また生徒獲得の種々の方策まで伝授して下さいました。ここまでして頂いて、もはや後に引けないと覚悟を決め、開塾の第一歩を踏み出しました。昭和五十五年二月のことでした。大人の方の入会があった時も、おろおろして先生にすぎりました。すると折帖に『千字文』を書いて、私に下さいました。折帖で私がお稽古し、「それを入門者に渡しなさい」とおっしゃるのでした。当時、先生は毎晩一〜二冊の折帖に臨書するのが日課で、私が何う朝も、「昨夜はこれを書いた」といつも見せて下さいました。

お宅の玄関の横に書道用品を入れてある棚がありました。年末の大掃除の日、山のような草稿を整理されていた時に、一枚を取って「これ面白く書けているから、取っておきなさい」と無造作に、落款印のない小品を下さいました。『無為』でした。先生が亡くなられた後、押印して頂き、額表装に仕立て、仏壇の隣に掛けました。今も私の生活、書の稽古場を見守り続けている額です。



「無為」

Ⅲ 別れ（昭和五十九年・一月）1984

私にとって誰よりも代え難い存在であった、師 露野高涯先生とのお別れがあまりに早く突然にやって来ようとは、当時の私には全く考えもしない事でした。その年の太玄書展目前の一月五日、ご他界。享年六十三。病の床に就かれてからの先生は別人になられてしまったような気がしました。「お前は竹のような女だ」。この言葉がよい意味だったように思えますが、先生亡き今、先生との最期の会話で覚えている唯一の言葉なのです。

先生と一緒に歩いた時はわずかに七年間。こんなに短い時だったとは。今にして思うと、とても濃密な楽しい時間だったと思います。今

でも「武藤、何してる？」とお声が聞こえた気もする時もあった、先生はずっとそばにいて下さる、私の中で生き続けていらつしやると思っています。

恩師への思い



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

菅菰会 大竹 伯 燿

この度は、第六十四回太玄会書展において、太玄大賞という身に余る賞を戴き誠にありがとうございました。これもひとえに四十三年に渡りご指導頂いた、私の師である佐々木恵陽先生・佐々木幸葉先生ご夫妻のおかげであります。今回の作品は、毎回指導されている速筆による軽さ・弱さを出さぬよう墨量・余白・造形・線質に注意し、少しは改善出来たのではないかと考えております。

師との出会いは、私が小学校三年生の時に母親に連れられて行った書道塾でした。私は、当時稽古中大人しく座ってられない少年だったため昭和時代ならではの鉄拳制裁を受けながらの稽古となりました。定規・こけし等、稽古場にあるものは何でもお叱りの道具と化していました、一番痛かったのは、師の大きな手のゲンコツだった事

を今も懐かしく思い出されます。また稽古中に作品が仕上がらないと次回の稽古までに百枚書いてこいとの指令が下り、必死に家で書いてきた事も良い思い出です。

中学生になる頃には、一緒に習っていた友人が学習塾に行くからと退会者が増える中、自分自身多少揺らいだ時期もありますが、亡き父より書道だけはやめてはいけなとのアドバイスがあり、今まで続ける事が出来ました。今思えば何か師に託すものがあつたのではないかとその思いに駆られます。

大学に入る頃、泊まりでの錬成会に参加するようになりました。師だけではなく石川会長を始め、菅菰会の他支部の先生方にもご指導頂くようになり、益々書の楽しさ・厳しさ・奥深さを感じる事となりました。また師について行く間に他会の普段お会い出来ない先生方とお話する機会を頂き、またお酒の席にも同席させて頂きました。こういった事から得た経験は、私にとってかけがえのないものになっております。

平成十四年十一月、私にとって最大の転機が訪れます。師の長女と結婚させて頂く運びとなり、師であり父・母であるという関係になりました。その後三人の子に恵まれ、三人共に恵陽先生に書道を指導して頂いております。師の血筋を引いているせいか私よりも子供の方が筋が良いようです。師のご自宅で食事をさせて頂く機会が増えました、関係が分からず、いつでも先生と呼んでいる私の子供達が不思議がついていたものです。平成・昭和と時代は移り代わり、師の鉄拳指導は封印されていますが、弟子へのうまくなつて欲しいとの強い情熱は

今も変わらず継続されており、大人から小学生まで厳しくも優しく熱い思いでご指導頂いております。またプロ棋士に書を教えるという、なかなか経験の出来ない活動もされています。

師がいつも言われている、「作家は書けなければ意味がない」との重い言葉を受け止めながら至らない弟子ではありますが、これからも師の背中を追い続け、書に精進して行く所存でございます。また太玄会発展のために微力ながらお役に立てるよう頑張っております。

この度は本当にありがとうございました。

物の見え方



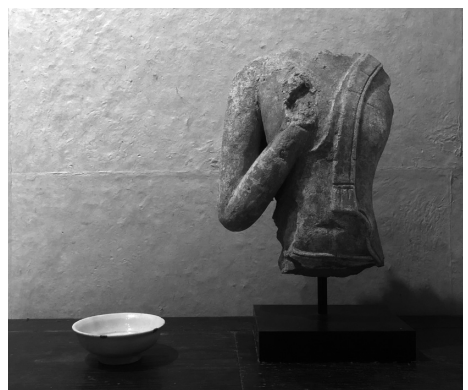
第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

書星会 鈴木竹園

私には古美術蒐集の趣味があります。書は勿論のこと、画や陶磁器、彫刻も好んで買うことがあります。

ある時、李朝の白磁皿（画像下）、それも分院と呼ばれる官窯のものを購入しました。李朝は侘び寂びを感じる当時の庶民が使ったものも魅力的ですが、官窯のものも、そこはかとなく感じる緊張感にファインが多いです。購入した当初は相場より安いいいものを手に入れた

と喜んでおりましたが、そうなるとうわがる人に見せびらかしたいと考えるのも人情というもの。そこで、同じく古美術蒐集を趣味に持つ先輩に見せたところ、首を傾げながら「これは…ちよっと違うんじゃないか？」と言われてしまいました。私はその人の鑑識眼を信じていましたから、贋物を



と判断されたことにショックを覚えると同時に、先程まで大事にしていた皿が急に疎ましく感じ始めました。さらにそんなものに手を出してしまったという後悔や自責の念も出てきました。しばらくは部屋の隅に転がしておきましたが、ある時目利きで名の通った骨董屋の主人と話している際、「贋物を掴ませられました」といつて笑いのネタのつもりで見せたところ、主人は「いや、これは大丈夫だと思います」とのこと。つまりは真作との判断です。そうしたところ、一八〇度見方が変わり、急にその白磁皿がお宝に思えてきて、大事に持ち帰ったのを記憶しています。

これではつきり悟ったのは、自分の眼の曖昧さです。他人の評価でコロナと物に対する見方が変わることを実感しました。自分の眼で見ているようで、実のところ他人の眼で見ていたわけです。自分の価値基準で判断する難しさを痛感すると共に、目勉強の重要性を切に感

じる苦しい出です。

翻って考えると、書における審査でもこれは共通して言えることです。自身が審査員として審査に臨む際には、しっかりとした判断基準を持った眼が求められるのです。この教訓を生かし、今後多くの名品を見て、絶えず勉強し、精進したいと考えています。

梅原清山先生の教え



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

書人社 備 前 徹

令和五年一月二十五日、恩師梅原清山先生が亡くなりました。新型コロナウイルスの影響で対面による稽古ができなくなってからは、郵便によるご指導になりました。作品をお送りすると批評とともに返送してくださって、また、二回に一回くらいは「直接伝えないとまどろっこしいから」とお電話を頂戴しました。厳しいご指導の裏には温かいお気持ちが籠められており、私も先生から何とか「少しよくなってきたようだね」というお言葉が聞けるようになっていたと思っていたのですが、そのレベルに達することがないまま、先生のご逝去を迎えることになってしまいました。

コロナ禍でのこの三年間、梅原先生のご指導で毎回指摘されてきたのは、一言で言えば「線が生きていない」ということでした。ここでは先生のお言葉を箇条書きにして皆様にお伝えしたいと存じます。

- ① 書は造形芸術であるから形はもちろん大切だが、線芸術でもあるのだから線が死んでいてはダメだ。
- ② 線芸術であるからには筆の使い方が重要だ。
- ③ 原典に形を似せることにこだわって姿をよくしても、筆の使い方ができていないと線は生きてこない。
- ④ 筆の使い方とは以下のようなことだ。これらができていないと線は生きてこない。
 - ・ 墨量の加減―筆に墨をたっぷり付けるときと、少し付けるときなどの工夫。
 - ・ 筆の動きのスピード感。緩急。
 - ・ 筆先の効かせかた、角度、筆の腹をどのように使うか。これは筆圧とも関わってくる。
 - ・ 臨書する原典から点画の筆圧の変化を見抜き力、悟る力が必要。
- ⑤ 作品として、生き生きとした健康体でもあることが重要。
- ⑥ 作る作品の紙にあてはまるよう一字一字の大小も考える。原典で小さく書いてある字だからと言って、作品にするときも小さく書けばいいというものではない。
- ⑦ 作品としては、書き出しの三〜五字、特に初字が重要。
- ⑧ また、作品の心臓部、三行ものなら中央行の胸に当たる部分が重要

だが、それだけでなく、腰に当たるところも重要。そこにどのような字を持ってくるか、撰文がモノを言う。

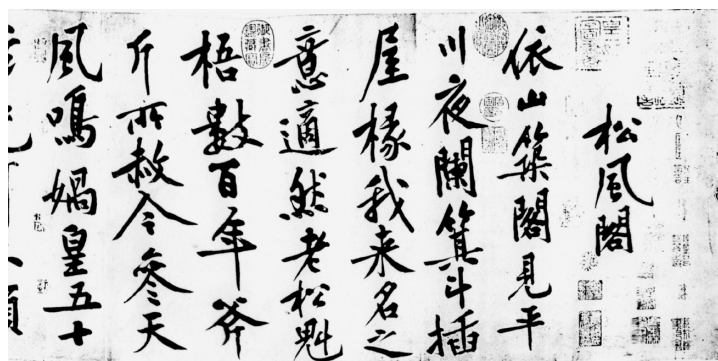
太玄会書展では黄山谷を臨書してまいりましたが、稽古の段階で梅原先生からいつも左記のようなご批評をいただいております。

⑨ 郵送してくる作品は似せようと神経質になっているだけで、字が死んでいる。

⑩ 黄山谷の時代とは様式が違うのだから、原典は参考にするだけ。

⑪ 黄山谷の時代は展覧会はなく文机で書いていたが、壁に掛ける形式の展覧会の作品として書く場合は字の大小も考えることが必要。

⑫ 「范滂傳」のような拓本を展覧会の臨書作品に仕立て上げるのは（あなたの力では）難しい。「松風閣詩卷」「伏波神祠詩卷」のような筆の動きがわかるものを元にするほうがやりやすい。



黄山谷「松風閣詩卷」部分

また、普段の稽古量が足りないことは先生にお見通しだったのだろうと思います。

⑬ 展覧会の時だけ頑張っても力はずからない。

⑭ 普段の稽古がモノを言うのだが、古典を臨書して自分のものにするには年数がかかる。

⑮ 普段の勉強の仕方を考えることが重要。無駄なところに力を注いでも効率が悪い。

文字では梅原先生のお声の調子までお伝えできず残念ですが、どのご指摘も私の胸にグサリと刺さることばかりで、梅原先生からお電話をいただいたときは、受話器に向かって何度も頭を下げることでしかできない状態でした。決して勤勉な弟子でないことは今も変わらないのですが、少しでも梅原先生のお眼鏡にかなうレベルに達するよう、これからも稽古を積んでまいりたいと考えております。

梅原先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます次第です。

振り返って



第六十四回太玄会書展 太玄大賞受賞

真仙会 松橋 多恵

幼い頃、家に飾られてあった掛け軸や板に彫ってある篆書文字が面白く、絵のようで飽きずに見ていることが好きでした。

小学生になると近くの書道塾に通い、習い始めて間もなく展覧会に出した書が入賞して先生や家族に褒められとてもうれしかったこと、それから入賞する度に母に連れられて東京都美術館に飾られた書を見に行き、帰りに「みはし」で食べたみつ豆の美味しかったことを太玄会書展を見に行くたびに、懐かしく思い出します。その後は、書道塾も辞めて長いこと書から遠ざかっておりました。

東京から長野へ縁があつて移り住み、子育ても一段落した頃、知人宅を訪問した際に一枚のお洒落で素適な書が目に残り、心惹かれて書きたい想いがムクムクと湧き上がり、居ても立つてもいられずご紹介されたのが、この隷書作品の筆者で恩師の関吾心先生との出会いでした。

先生は知識も力も無い私を快く受け入れて下さり、親切丁寧にご指導いただき、現在は隷書を主体に学んでいます。

ある時、先生から後漢末の三国史の魏にかけての隷書の形が「漢隷

にない新しさがあり、とても面白い」と勧めて下さいました。隷書と楷書の端境期の魏隷は、今まで習ってきた漢隷のような自然な波勢の美しさはなく、えぐるような線はどこかきこちなく作りすぎる感があり、当初は馴染めず思うように書けなくて悩み苦しんでおりましたが、先生の辛抱強く熱心なご指導のおかげで、これまで続けることができました。今回の大賞受賞に「最高賞よくやった。魏の隷書が認知された」と自分のことのように喜んで下さった先生には感謝の気持ちでいっぱいです。早いものでこの道も四十年近くがたち、ようやく進み行く先に明かりが見えてきました。



野坂叫星先生



関吾心先生

梅原清山先生追悼特集

令和五年（二〇二三）一月二十五日、梅原清山先生が安らかにご逝去されました。心よりお悔やみを申し上げると共に、ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

梅原清山先生（一九二二―二〇二三）



大正十一年（一九二二）生まれ
青山杉雨先生に師事
旭日小綬章
日本藝術院賞・日展会員
太玄会名誉顧問
謙慎書道会顧問
寄鶴文社顧問
書人社主幹

【梅原清山先生と太玄会】

- 昭和三十五年（一九六〇）の第一回展から六十四年間連続出品
- ◆総務部長……………昭和四十六年（一九七二）～昭和四十七年（一九七三）
- ◆事務局長……………昭和四十八年（一九七三）～昭和五十一年（一九七六）
- ◆運営委員……………昭和五十二年（一九七七）～平成十五年（二〇〇三）
- ◆常任顧問……………平成十六年（二〇〇四）～平成二十五年（二〇一三）
- ◆名誉顧問……………平成二十六年（二〇一四）～令和五年（二〇二三）

梅原先生の思い出

西村 東 軒

先ずは梅原清山先生に師事するきっかけから。公募展に出品を希望していた折、子供のころから縁のあった筆墨店から紹介された一人であり、また私が子供のころから親しんでいた欧陽詢風の楷書の書き手だったことからである。第一印象は「何てぶっくらぼうな…」であった。二〇歳で師事し半世紀お世話になった。先生は甲骨文から篆隸楷行草調和体、仮名と各体をこなし幅の広い書家であったといえる。その中でも特に欧陽詢の楷書が常にあったように感じている。構造的でバランスの取れた造形と空間分割を基本に作品を見ていたのだろう。

ある時「西村君は俺の楷書が好きだと言つてうちに来たが、まんざら外れてねえんだよ。西川寧先生から『梅原さんは楷書がいいですね』って褒められたんだよ」と嬉しそうに話されたことがあった。晩年は楷書大字作品に拘り続け、昨年の第九回日展における



日展審査員 梅原清山先生 文化勳章受章者 日本芸術院会員 文化功労者 青山杉雨先生

楷書作『遵義』をも
って完結し満百歳の
人生を全うしたよう
に感じられるのであ
る。実質的な絶作と
なった『遵義』は文
言そのままで意志強
靱、筆力の凄みが含
有され、残された我々
への強いメッセージ
であったのではなか
ろうか。

ご遺族から遺言書
を見せて頂いたがそ
こには残されたご遺

族への思いやりと同時に弟子の行く末を心配された思いが込められた
長文の内容で読み進める間目が熱くなり抑えるのが辛かった。

仕事で一緒に新幹線に乗った時は弁当前にアイスクリームとコーヒ
ーを注文、上野の豚カツ屋や銀座で食事したこともあった。作品献上
の折り高門宮邸に二人で伺ったこと等々走馬灯のように思い出され尽
きない。先生の恩に報いることとは義に遵い書家として人として人生
を全うすることなのだと思う。



高門宮邸下をお招きしての選抜展

梅原清山先生を偲んで

江原 見山

「何てカッコイイ字なんだ！」

昭和五十五年五月、大東文化大学書道部主催の社中説明会（大学に
於いて新人生を対象に、各会派の社中代表の学生が順次PRを行い、
引き続き各社中ごとに席書会を催す。新人生はそれを自由に見学でき
る）での事です。書人社席書会々場に広げられた梅原先生揮毫のお手
本の数々。その一点一点に私は目を見瞠りました。

二ヶ月後、待望の入門が許され以来四十年以上の長きに亘り先生の
ご薫陶を賜りました。そし
て今でもそのお言葉はあり
し日の先生のお姿とともに
しっかりと蘇ってきます。

師匠青山杉雨先生のお稽
古では、「折帖一ページ分と
毎週千枚ずつ書いてお見せ
したら、『随分そっくりに書
くな』と褒められたよ」こ
れこそ梅原先生の真面目を
表していると思います。

書芸術に関しては「書と
は造形芸術であり線芸術で





もある」「作品の良し悪しは結局墨の使い方なんだよ」また作品構成における余白の重要性もしばしば説いておられました。

撰文については、「漢字学者が頭を捻るような難しい語句は避けた方がいいね」「文字の展覧会じゃないんだから意味が良くてもダメなんだよ」特に少字数作品における撰文の難しさを強調されていました。

そして指導者として、「師匠たる者、弟子の十倍努力しなくてはいいけない」優しさを内に秘めた厳しさをもつて常に熱の籠もった指導をされていました。

先生との思い出は簡単には語り尽くすことは出来ません。思い起こすままにいくつか先生のお言葉をここに書き留め、先生を偲ぶようと致します。

先生、安らかにやすみ下さい。

合掌

先生との思い出

石井 蕙園

梅原先生との御縁は六十年近くとなり、御指導頂きました貴重なお話を皆様にお伝えしなければと悩みましたが、思い出されるのは幼い頃の思い出ばかりでした。

小学一年生、書き初め大会出品をきっかけに、太玄会（靈芝会）の大岩白涛先生の教室に入門し初めて提出した清書が梅原先生が発刊されていた月刊『書人』でした。

高校生になって太玄会書展一般部に出品する事となり、梅原先生をお招きしての新年会に初めて参加する事ができ、お会いする機会に恵まれました。

「あなたが石井千恵ちゃんか、名前の書き方が大人で上手だなあと見ていたよ」と言って下さった時の眼光の強さと共に嬉しさが忘れられず今でも心の勲章です。

大岩先生の御葬儀で泣きじゃくる大学生の私に、「僕のところにおいで」と、お声を掛けて下さり、以来四十年以上御指導を受ける事になりました。

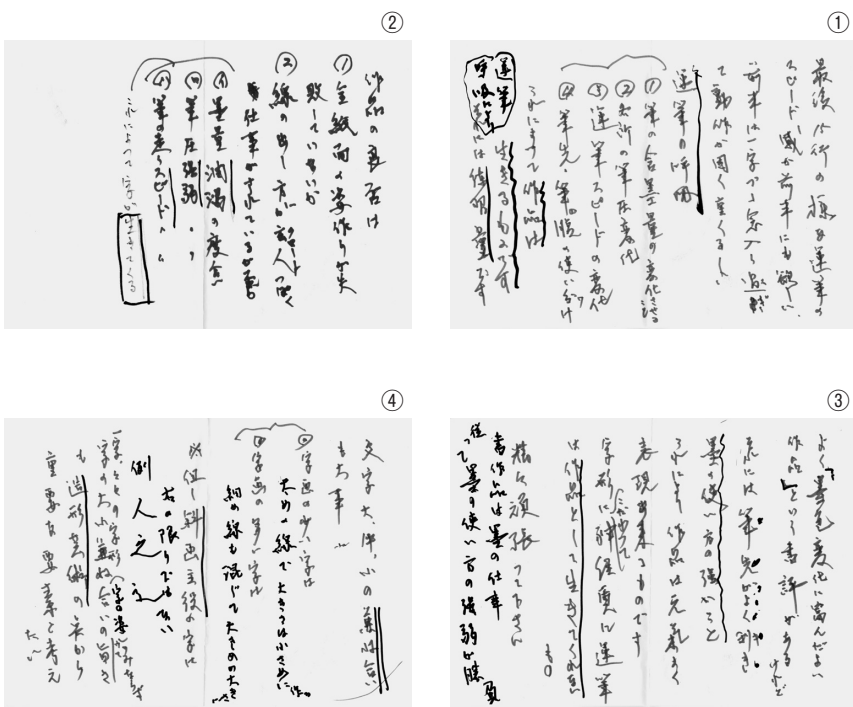
初めて梅原先生とお話した時の鋭い視線の怖さと、はにかんだ様な笑顔に魔法をかけられ、未だその魔力は解ける事がなく書道が続けております。

「書は楷書に始まり楷書に終わると言うけれど、本当だなあ」と晩年良くお話されていました。

この写真(①)④は添削作品の中に挟まれていたメモ書きですが、先生の最後のお言葉として心に刻み、基本を大切にこれからも書道を続けていかなければと、大切に保管しております。

先生

青山先生と書道談議にお忙しい毎日をお過ごしでしょうか。



梅原清山先生への感謝の気持ち

荒井湧山

大学入学後、楷書を学べる師匠を探していた頃、学年が一つ上の江原さんに月刊「書人」を見せて頂きました。「世の中にこんな素晴らしい楷書を書かれる先生がいらつしやるんだ!」と、その時の驚きは今でも忘れることができません。そして、この先生こそ一生の師にしようと思ったのが梅原清山先生でした。当時、唐と北魏の楷書をとにかく上達したい思いが強かった私にとって、梅原先生との出会いはその後の書道人生を大きく変えることになりました。

卒業論文で中国・日本の直筆写経を文献に楷書の変遷をテーマに考察した際、口頭試問で指導教官の青山杉雨先生から「これだけ調べたのだから、これからは写経を書けるようにならなさい」というお言葉を頂いたことがありました。そのことを師匠にお伝えしたところ、当時、青山先生のゼミ生の論文は梅原先生も読まれていたようで「論文読んだよ。君は写経をきちんと書けるようにならなさい」と、お二人から背中を押してくださったことは、書と教育の道に生きていくことに決めていた私にとって大きな指針となりました。その後も中国の西涼、北魏、唐時代、日本の天平、平安時代の表現を模索してきたものの、未だ中途半端で満足いくものには至りませんが、これからも期待に答えられるような高い志を持ち続け、現代の写経生を目指していきたいと思っています。

師匠との思い出としては、今から約二十年ほど前、細楷だけでなく

梅原先生のように大字で力強い楷書作品を書いてみたいと一念発起して拙い草稿をお見せしたところ、「荒井君は、大字は体質に合わないからやめなさい」と言われたことがあります。そう言われてしまうと克服しないと気が済まない性分なのでしょう。「先生のように私も大字をきちんと書けるようにしたいんです」と申し上げたところ、「体質に合わないものを身に着けるのは苦労するぞ。やるならその覚悟でやりなさい」とお言葉を頂いたことがあります。作品だけでなく、弟子一人ひとりの性格や資質をいち早く把握されご指導されていた先生は、まさに名医でした。案の定、大字は勉強不足でままだりませんが、天国から「少しはまともになったな」と言われるよう精進してまいります。

コロナ禍のお稽古は、全て通信添削でした。返送される封筒には作品に貼られた付箋に修正ポイントがたくさん書かれていました。それを参考にまた作品を送ると、先生はさらに深い言葉を書かれて送ってくださいます。そして、多くの弟子の作品をお嬢様が全部手配されていたことも承知していました。先生にお会いできなくても、お二人のお心遣いに何とか答えたいとの思いが自らを鼓舞し続けた三年間でした。

四十年間お世話になった梅原先生には、何とお礼を申して良いか言葉が見つかりませんが、これまでの教えを支えにさらに前へ歩みが続けることがご恩返しと心に誓い精進してまいります。梅原先生、奥様、そしてお嬢様、本当にお世話になりました。そして、どうかこれからも私たちを見守って頂きますようお願い申し上げます。



無礙



第22回日展 会員賞 (1990年)

隨緣



第27回日展 内閣総理大臣賞 (1995年)

騎靡



第45回現代書道二十人展 (2001年)

詩經 齊風「南山」之一句



第38回現代書道二十人展 (1994年)



第45回記念太玄会書展 (2004年)

涉獵



書人社創立50周年記念選抜展 (2008年)

慶雲起



第55回記念太玄会書展 (2014年)

天馬

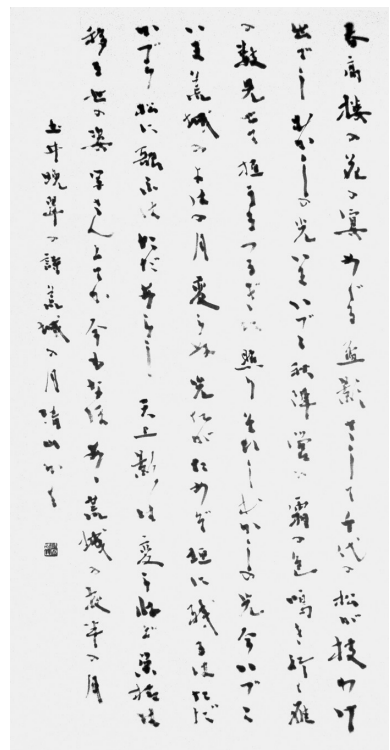
漢鏡歌三章

第43回現代書道二十人展 日本藝術院賞 (1999年)



荒城の月

第51回現代書道二十人展 (2007年)





篤
敬

第63回太玄会書展（2022年）



戯
晏

第10回寄鶴文社書展（2022年）



遵
義

第9回日展（2022年）

編集後記

第六十四回展が今年一月二十日(日)～二十六日(木)まで東京都美術館で開催され、七日間の会期が無事に終了しました。今回は作品解説、授賞式、祝賀会も本来のスタイルに戻りつつあり、以前のような盛り上がりを取り戻した書展となりました。作品にもコロナ禍を吹き飛ばす思いが込められていたのが印象的でした。

何より特別講演の復活は私たち会員にとって大変有意義な時間となりました。今年度は、土橋靖子先生をお招きし「日本の心 和の心」筆文字の世界を通して」をテーマに私たちの日常生活に様々な和の世界が満ち溢れていることを気づかせてくださり、古筆はその日本人の心、和の心から生まれた審美眼、美意識から成り立っていること作品を通してお話くださいました。そして、土橋先生が和の心をいかに大事にされ書作に向かわれているのを痛感し、私たちが忘れてかけていた細やかな心遣いと呼び起こしてくださいました。特集も組みましたので是非ご一読いただければと存じます。

また、今年一月に特別顧問の梅原清山先生が一〇〇歳で逝去されました。梅原先生は、太玄会書展の第一回展から連続出品され、運営に長く携われこの会を支えてくださった功績は本当に大きなものでした。ここで太玄会の誕生から見守ってくださった先生をまた失うことは本当に悲しいことですが、残された私たちが遺志を受け継ぎ、さらなる発展へつなげていくことこそご恩返しと肝に銘じ精進していく所存です。書かれた作品の謹厳な線質とそこから生まれる余白美は、観た者が背筋を伸ばし、心を整える空間を常に表出されていました。厳しくも愛情深いお人柄に私たち弟子は、本当に多くの事を学ばせて頂き感謝の言葉は尽くせません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

そして、来年一月はいよいよ第六十五回記念展を迎えます。西村会長が「十五団体が結束し次の時代にどのように立ち向かって行くのか、それは私たち一人ひとりが作品にどのような姿勢で取り組むかにかかっている」と話されていましたが、まさにその通りと考えます。これからも節目を大事にしながら各団体の特長を生かし、皆さんと一緒に邁進していきましょう。

令和5年9月

広報部長 荒井湧山

令和五年九月発行

太玄会会報 第78号

発行者 太玄会

編集者 太玄会事務局広報部

制作 (株)風雅プランニング